
魔法少女リリカルなのは 常識を変える者・創造する者

松上

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 常識を変える者・創造する者

【Nコード】

N0974U

【作者名】

松上

【あらすじ】

神のミスにより死んでしまった主人公達。

神の力により『魔法少女リリカルなのは』の世界に転生する。

人の笑顔の為に戦う主人公達に待っている未来は希望か？

絶望か？

その答えは誰にも分からない。

だが、世界は彼等と言うイレギュラーを消そうとしている。

転生者対世界……

転生者の願いが勝つのか、世界の運命が勝つのかは分からない。

分かっているのは、主人公達は人の為に戦う事だけ……

ブローグ1（前書き）

どうも、松上です!!

不定期更新ですが、頑張りますので応援よろしくお願いします!!

プロローグ1

“平行世界”と言う言葉を……貴方は知ってますか？
平行世界とは“もしもの世界”や“くだったらの世界”と言われる、私達と異なった世界です。

勿論、世界が違うのですからまた違った人物が存在します。
しかも其の世界に、必ず其の世界の話が存在します。

海賊の話、忍者の話、死神の話、妖怪の話 e t c 挙げれば限りがありません。

しかし、“魔法が存在する世界”がもし存在したら……貴方はどうしますか？

この話の主人公達は、神のミスにより死んでしまい、魔法が存在する世界に転生します。

主人公達は私利私欲の為に戦わず、他人の為に戦います。

主人公達は、其の世界の運命を変えます。

全ては、その人達の笑顔を見る為に……

そんな主人公達の話です。

其れでは、どうぞ……

プロローグ1（後書き）

次回は主人公達が登場します

楽しみに！！！！

ブログ2（前書き）

連続投稿！！

チート能力を貰う話です

プロローグ2

side?

……先ずは自己紹介をさせてくれ。

俺の名前は佐藤劉。
やんごろう

何故急に自己紹介をしたのかと言うと……簡単に言ったら俺が死んだからだ。

俺は普通の高校一年生だった（・・・）。

何時も通り学校に行って、何時も通り授業を受けて、何時も通り昼飯を食って、何時も通り部活をしていた。

だが、此処からが何時も通りじゃなかったんだ。

俺は部活が終わって家に帰ってたんだ。

そして、歩道を渡っていた。

其の時に、トラックが物凄いスピードで俺に突っ込んで来たんだ。俺は避ける事も出来ずに死んでしまった。

そして俺は今、白い空間をずっと漂っているんだ。

「はぁ……不幸だ。」

俺は『とあるシリーズ』の主人公の上条 当麻の言葉を口ずさんだ。

「……い……お……い……」

俺が落ち込んでいたら、何処からか声が聞こえてきた。

「お……い……おー……い!!」

そして次第に声が大きくなってきた。

「おーいーい！ー！」

そして遂に、声の主が俺の目の前に現れた。

「はぁ……はぁ……良かった、誰かが居たよ……」

声の主は世程急いだのだろう、肩で息をしながら俺の顔を見てそう言った。

「お前は誰だ？」

「はぁ……はぁ……俺の名前か？俺の名前は津田遊星^{つだ ゆうせい}。高校一年をやっていたんだ。」

金髪のイケメンの男・津田 遊星は笑って俺に自己紹介をしてきた。

……ハーフか染めてるな、コイツ。
俺も人の事は言えないがな……

「俺は佐藤 劉。俺もさっき迄高校一年をやってた。」

「やってた？まさかお前も……死んだのか？」

「……嗚呼、さっきトラックに退かれて死んだ。」

「ま、マジかよ。……俺もトラックに退かれて死んだんだ。」

ま、マジかよ……

二人とも、トラックに退かれて死ぬとか運が無さ過ぎだろ……

「はぁー、取り敢えず友達になろうぜ。死後の世界で、友達が居なかったら辛いからよ。」

遊星は俺に苦笑いしながら、俺にそう提案してきた。
しかし、遊星の言う通りだな……

「まあ、よろしくな、遊星。」

「よろしくな、劉。」

俺達は握手をしながら、取り敢えず笑顔でそう言った。

「あ、あのー、少し良いですか？」

すると突然、俺達の右側から声が聞こえてきた。

俺達は同時に顔を右に向けると、イナズマイレブンに出てくるキヤラが其処には立っていた。

「「……アフロディ？」」

俺と遊星は声を揃えて、イナズマイレブンのキャラの名前・アフロディの名を言った。

ってか、遊星もイナズマイレブンを知ってたんだな……死後の世界で話せる事が在って良かったぜ。

「確かに僕の名前はアフロディですけど……って、そんな事言ってる場合じゃない!」

すると俺達の前に居る人物・アフロディがノリツツコミ的なコメントをして俺達にそう言った。

マジかよ……

俺は驚きながら遊星の顔を見ると、遊星もアフロディの顔を見て驚いていた。

「僕は神様です！！僕の部下のミスで貴方達は死んでしまいました、なので僕が責任を持って貴方達を転生させます！！」

……成る程、神様ごっこをしてるんだな。

俺も小さい時はやってたなあ……でも、小学校低学年でそんな子供みたいな遊びは止めたけどな。

でも、このアフロディと名乗る少年は神様ごっこをしている。

俺達はこの子の遊びに付き合ってやんねえとな！！

「そうか、神様かぁ。だったら、俺はアポロンな。」

「なら、俺はゼウスだぜ！！」

俺がアポロンとアフロディに言うと、遊星もゼウスと同じ事を考えてたらしくアフロディにそう言った。

しかし遊星、ゼウスってお前神様の中でも最高神だろ……

まあ俺も人の事は言えないけどさ……

「バカにしません！？僕はマジで神様なんですって！！貴方達を転生させに来たんです！！信じてください！！！！」

アフロディが真剣な顔をして其処迄言うなら、まあ信じるしか無いだろうな……

「……其れで何処に俺達は転生するんだ？」

俺がアフロディに聞くと、アフロディは何処から一枚の紙を取り出して何かを確認した。

……出来れば平和な世界で普通に暮らしたいんだが。

「魔法少女リリカルなのは”の世界に近い世界ですよ。」

……mazide?

「マジかよ！！ナンバーズに会えるぜ！！ああー、憧れのナンバーズ……よっしゃー！！！」

遊星つてナンバーズが好きなんだ。

だったらstrickersのラストを変えて護つてやりたいよな……
……
つてラストを変える”原作ブレイクをするだから……

「アフロディ、なのはの世界に転生して原作ブレイクをしても良いのか？」

「原作ブレイクですか？……構いませんよ、その世界は“魔法少女リリカルなのはの世界に近い世界”ですから……」

俺が質問すると、アフロディは少し考えて俺に笑顔でそう言うてくれた。

原作ブレイクをしても良いなら大丈夫だな。

「其れでは欲しい力を言つて下さい。望んだ力は全て差し上げます。」

所謂チートをあげますか……

原作ブレイクしても良いなら、原作キャラ達を絶対に救いたい、否、救ってみせる。

だとすると、やっぱこの力が一番妥当だよな……

劉「俺は“常識を操る程度の能力”が欲しい。この力が在れば、常識を操って皆を笑顔に出来るからな。それからBLEACHの斬魄刀が全部欲しい。勿論、BLEACHに出てくる技も使える様にしてくれ。其れから、NARUTOに出てくる技をデメリット無しで使わせてくれ。後は……瞬間記憶能力に身体能力MAXで地球の本棚が欲しい。これ位かな。」

「チートだな、劉。……まあ、俺も人の事は言えないがな。俺も瞬間記憶能力に身体能力MAX、地球の本棚が欲しい。其れで、“創造する程度の能力”が欲しい。後……デジモンの技と武器を使えるのと家庭教師ヒットマンREBORNに出てくる技を使える様にしてくれ。」

“創造する程度の能力”って事はFateの武器やりボーンの武器も創造出来る訳だな……

「えっ！？た、たった其れだけですか！！？もっと言ってくれれば差し上げるんですよ！！」

するとアフロディが、俺達が頼んだチート能力が少ないからなのか、焦った顔をして俺達にそう言ってきた。

そう言われても、これだけでも十分チートだからなあ……

「俺はこれだけあれば皆を救える。だから、これ以上のチート能力

は要らねえ。」

「俺もだ。俺達が力を貰うのは皆を救いたいからだ。」

俺達が真剣な顔をしてアフロディにそう言うと、アフロディが啞然して俺達の顔を見てきた。

「……貴方達は普通の人間と違うんですね。……其れでは、貴方達に力を授けます……！」

アフロディは俺達にそう言うと、何か呪文みたいな物を呟き始めた。

そして行き成り、俺の頭に大量の情報が入ってきた。

俺は一瞬、大量の情報を処理しきれずに気絶し掛けたが、何とか踏み留まって気絶を堪えた。

遊星を見ると、遊星も俺と同じ事になったらしい。

「これで貴方達が望んだ力は授けました。そしてこれから、“魔法少女リリカルなのは”の世界に近い世界に転生させます。転生する時にあたって何かリクエストは在りますか？」

転生するだけなのにリクエストなんか在る訳……否、在ったよ。

「転生する時は五歳にしてくれ。流星に赤ん坊からやると……な？ 後、なのは達と同年で尚且つなのは達が住んでる場所に転生させてくれ。なのは達が五歳の時に転生させてくれ。」

「……そうだな、俺も五歳にしてくれ。後、俺はスカリエッティの所に転生させてくれ。勿論、劉と同じ年に転生させてくれよ。」

そうか、遊星はナンバーズの所に行くから此処でお別れか……

星「劉、此処でお別れだけど話が進めばまた会える。其れ迄の間に、俺はスカリエッティに復讐を止めさせる。だから、必ずお前も原作を乗り越えろよ!!」

遊星は笑顔で俺にそう言って元気付けてくれた。

遊星……

「嗚呼、お互い頑張ろうぜ!そして、また何時か必ず会おうな!!」

俺は遊星にそう言って手を差し出して、俺と遊星は堅い握手をした。

「……其れでは送ります!!頑張ってください!!」

「「嗚呼!!」」

「転生プログラム、始動!!」

そして俺達は、“魔法少女リリカルなのは”の世界に近い世界に転生した。

プロローグ2（後書き）

次回はキャラ設定です

お楽しみに！！

〓キャラ設定〓（前書き）

劉達のキャラ設定〓

あくまで五歳の時の設定ですので御了承ください

くキャラ設定く

主人公

名前 佐藤 劉さとう りゅう

性別 男

年齢 五歳

容姿 BLEACHに出てくる日番谷 冬獅郎を幼くした姿

性格 優しい・面倒見がいい・心配性

能力 常識を操る程度の能力

（劉が望んだ力が世界の常識になる。どんな常識も作れる。）

BLEACHの斬魄刀全て使用可能

（BLEACHに出てくる全ての斬魄刀を召喚し、使うことが出来る。卍解も出来る。）

NARUTOに出てくる全ての技使用可能

（NARUTOに出てくる忍術・幻術・体術をデメリット無しで使える。）

身体能力MAX

（身体のあるゆる力がMAX。筋肉痛などは起きない。）

瞬間記憶能力

（一度見たものは絶対に忘れない。また、光速で現れた物も正確に記憶できる。）

地球の本棚

（地球の全ての情報が分かる。ただし、情報が多すぎるのでキーワードを使い欲しい情報を絞り込む。）

備考 本作の主人公。

神の部下のミスによって死んでしまった。

しかし、神により『魔法少女リリカルなのは』の世界に転生した。頭は転生前から賢く、全国テストで一位を獲ったこともある。

歌唱力もあり、プロからスカウトが来た事もある。

本人は気付いていないが、かなりの鈍感。

あだ名がフラグメーカー！。

現在のはやての家で居候中。

もう一人の主人公

名前 津田^{つだ} 遊星^{ゆうせい}

性別 男

年齢 五歳

容姿 NARUTOに出てくる波風 ミナトを幼くした姿

性格 明るい・優しい・お調子者

能力 創造する程度の能力

（遊星が望んだ物は全て創造できる。FATEの“約束された勝利の剣”や家庭教師ヒットマン REBORNの“死ぬきのグロープ”、仮面ライダーの変身ツールなども創造できる。また、デメリットが無く遊星の体力が続く限り創造できる。）

デジモンの技使用可能

（デジモン全ての技をデメリット無しで使える。）

家庭教師ヒットマン REBORNの技使用可能

（家庭教師ヒットマン REBORNに出てくる全ての技をデメリット無しで使える。山本の時雨蒼燕流や獄寺のロケットボムなどが使える）

身体能力MAX

（劉と同様。）

瞬間記憶能力

（劉と同様。）

地球の本棚

（劉と同様。）

備考 劉と同じ転生者。

劉と違い、スカリエッティの所に転生したので出番は少ない。しかし、能力は劉に遅れを取らず最強。ナンバーズが大好き。

劉と再開するのを楽しみにしている。

現在、スカリエッティを説得中。

くキャラ設定く(後書き)

次回は劉があの子と接触します

お楽しみに!!

YAGAMI HAYATE (前書き)

題名通りあの子が出ます

只、すいません!!! ort

言葉が全部漢字です・・・

この小説は泣いてる時以外は漢字です

泣いてる時だけは平仮名です

今頃すいません ort

今回も暖かい目で見てください

YAGAMI HAYATE

side 劉

目を開けると青い空が広がっていた。

しかし、背中には地面の温もりを感じない。

俺は一度顔だけを反対に向けた。

そこには……

海と雲が広がっていました

劉「ぎゃあああああああ！……！？」

俺は叫びながら垂直に落ちる。

あのまま落ちると足が折れるので、直ぐに反対を向いたがこのままでは……

死ぬ……！！

劉「どうすれば……！！？そ、そうだ、アフロディから貰った
“常識を操る程度の能力”を使えば……！！」

しかし、どんどん海が近づいてきた。

劉「ヤケクソだ！！！！『俺が望めば何でも出来る常識！！！！』、飛ぶ事を望むーーーー！！！！」

俺がそう叫ぶと天使の羽根の様な物が背中から出てきた。そして、空を飛んだ。

劉「はあ・・・はあ・・・心臓に悪いわ。はあ・・・はあ・・・遊星も俺みたいに落ちたのか？まあ、あいつには“創造する程度の能力”があるから、何か空を飛べるものでも創造するだろ・・・多分。」

なんか心配になってきたな・・・

劉「取り敢えず地上に降りよう。考えるのはそつからだ。」

俺は羽根を上手に使い、陸地を目指して飛んだ。

劉「やっと陸地が見えてきた・・・長かったなあ。」

あの後、俺は十分間も空を彷徨った。

地球の本棚を使おうと思ったが、検索中に海に落ちたら嫌だったの
で使わなかった。

なので、地道に探しようやく見つけた。

劉「さっさと降りますか！！」

俺は人が来なさそうな場所に行き、そこで降りた。

劉「ふう、なんも」ひ、人が、人が空を飛んどった!!」・・・見
つかった。」

此処にも人が居たなんて、俺って不用心だな・・・はあ、後ろに居
たから分からなかった。

常識を操る程度の能力を使えば、記憶を消す事も簡単だし良いか。
そう思っただけ俺は後ろを向いた。

そこには、車椅子に乗っていて、肩くらいまでしかない茶髪をした
女の子・・・

???「なあ、どうやって空を飛んどったんや？」

八神 はやてが居た

諒「（俺って上条 当麻並に運が無いのか？）はあ・・・」

???「ど、どうしたんや、溜め息なんか吐いて？」

この子は100%はやてだな。

関西弁だし・・・

しかし、この時期から夜天の書のバグがあつたのか？

記憶が曖昧だから全然覚えてねえ。

・・・後で地球の本棚で検索してみるか・・・

???「な、なあ、何か話してえな。頼むわ!!」

・・・忘れてた。

取り敢えず自己紹介が無難か・・・

劉「悪い悪い、少し考え事をしちまって・・・まずは自己紹介をさせてくれ。俺の名前は佐藤 劉。一応五歳をやっている・・・多分。」

???「多分って君は変わつとるなあ。まあええわ。ウチの名前は八神 はやてや。平仮名ではやてやねん、変わつとるやる？」

劉「別に普通にはやてにぴったりの名前だと思うぞ。」

名前を付けられる時の理由は森羅万象、名前にはちゃんとした意味がある。

それが変だからと言って笑う事はダメだ。

まあ、俺は笑わないけどな・・・

はやて「そ、そうか？嬉しいな、名前を誉められるなんて／＼／＼／＼」

はやては顔を赤くしながら言ってきた。

顔が赤い〓風邪を引いている可能性、風邪を引いている可能性〓とても危険な状況

・・・これはやばい！！！！

劉「はやて、お前の顔が赤い！！これは風邪を引いている可能性があるある！！こんな所で油を売っていてはダメだ！！俺が送っていつてやる！！さ、案内しろ！！」

俺ははやての車椅子の後ろに回り、全速力で走り始めた

はやて「な、なんでやああああああ！！！！？」

劉「叫ぶ暇が有るならお前の家を案内しろ！！！」

はやて「わ、分かったわ。・・・次は右や。」

右だな！！

劉「了解！！！」

俺は、はやてに案内されはやての家に向かった。

はやて「こ、此処がウチの家や。」

此処だな・・・思ってた以上にデカッ！！！！

劉「はやてってお嬢様だったのか？」

ダメだ、原作知識が曖昧だから全然分からん。

はやて「違うで。まあ、取り敢えず家に上がって行き！」

劉「分かった、そうするわ。」

そして、俺ははやてを押しながらはやての家に入った。

余談だが家に入る時、玄関には管理局の・・・誰かの使い魔の・・・猫がいたが魔力の欠けらも無い俺を一度見ると直ぐに寝やがっ

た。

イラッとしたが頑張ってCOOLにした。
頑張った、俺！！！！

はやて「ただいまー！」

劉「お帰りー。」

はやて「何で劉君がお帰りって言うんや？」

何でってはやて、お前なあ

劉「人は『お帰り』って返事をされると嬉しくなるんだ。俺もな。
だから言った。それだけだな。」

挨拶をされると嬉しくなるよな？

人は嬉しい気持ちがあるから頑張れる！！・・・って誰かが言っていたような気がする。

はやて「・・・グスッ」

劉「ん？・・・！？は、はやて、何で泣いてるんだよ！？俺ってお前を傷つけるような事を言ったか！？」

女の子を泣かせる事は罪だったような・・・

死んで許してもらえないか？

・・・転生して経った一時間弱で死ぬなんてort

はやて「グスッ、ちゃうねん、うれしいねん、おかえりっていつてくれるひとがあるから・・・うち、ずっとひとりやったから・・・」

！？思い出した、はやての両親は既にこの世を他界しているんだっ
た。

はやてはずっと一人だったんだ。

この家の管理だって管理局の・・・誰かが管理してるんだっ
たから、この涙は嬉し涙だったのか・・・

劉「はやて。」

俺ははやてを抱き締めた。

はやて「りゅう・・・くん？」

劉「辛かったよな？淋しかったよな？安心しろ、俺がお前の傍に居
てやる。お前はもう一人じゃない・・・だから・・・今は泣い
とけ。」

俺がそう言うとはやては泣きだした

はやて「つらかった！！さびしかった！！うわあああああん！
！！！！！！」

劉「よしよし、よく頑張ったな。」

俺ははやての背中を擦りながら言った。

はやて「うわあああああん！！！！」

side out

side はやて

はやて「ごめんな、服汚してもうて・・・」

ウチは劉君の胸に泣いてしもうた。

すっきりしたんやけど、その代わりに劉君の服をウチの涙で汚してもうたけど・・・

劉「良いよこれくらい。はやてみたいな美少女の涙で汚れたんだから自慢しないとな!!」

び、美少女って／／／

真顔でそんな事言われたらウチ・・・／／／

あかん、胸が熱くなつとる・・・

諒君って今日初めて会ったのに此処まで優しくされたら、ウチ・・・やけど、劉君の秘密を教えてもらわないとな!!

はやて「なあ劉君？劉君の秘密を教えてくれへんか？」

side out

side 劉

やっぱ教えた方が良いよな、記憶を消すとかしたくないし・・・

劉「そうだな、今から話す事は事実だから信じてくれよ。まず俺は少し変わった人間なんだ。まあ超能力者みたいな感じだ。力の名は“常識を操る程度の能力”。俺が作った常識はこの世の常識になる

んだ。はやてが俺と会った時、俺は空を飛んでただろ？あれは『俺が望めば何でも出来る常識』を作ったからだ。此処迄で質問はあるか？」

はやて「はい先生！！」

はやてが手を挙げて聞いてきた。

こういうのはノリが大切なんだよな・・・

劉「なんだ、はやて君？」

はやて「先生は何処に住んでるんですか？」

それは関係・・・あつ・・・

諒「・・・野宿です。」

アフロデイに頼むの忘れてた。

遊星はスカリエッティのアジトに住むはずだよな・・・
羨ましいort

はやて「な、ならウチの家に住めへんか？ウチの家、開き部屋が沢山有るから。どうや？」

劉「・・・」

はやて「あつ、ごめんな。無理やも「女神はやて、ありがとうございます」
ざいます！！！！」「う、ウチが女神！？」

この子優しすぎ！！

今日から女神はやてとして崇めないとな！！

劉「ありがとな、女神はやて！！」

はやて「や、止めてえな。さっきみたいに、はやてでええから。」

マジで優しい。

感動して泣きそう。

劉「ありがとな、はやて！！これからよろしくな！！」

はやて「よろしくな、劉君！！」

無事俺は住む場所を手に入れた。

だが俺は、コナンみたいにタダ飯を食うだけと言う居候はしない。
ちゃんと俺ははやての家の家事はするぜ！

ダメ人間にはならんぞ！！！！

頑張るぜ！！！！

YAGAMI HAYATE (後書き)

次回ははやてがある想いに気付きます

次回もお楽しみに!!

気付いた思い（前書き）

在り来たりだ・・・

やっぱり戦闘描写を書くのは難しい・・・

広ーーーーーいい心で見てください!!

お願いします!!

気付いた思い

side 劉

俺は今、砂漠が広がる場所に立っている。

俺の向かい側には、影分身であるもう一人の俺が立っている。

劉「ふう……じゃあ、始めるか。」

影分身「嗚呼、早くしないとはやてが起きるからな。」

そんな会話が終わると俺達は構えた。

ヒューー

俺達には風の音しか聞こえない。

影分身「……行くぞ!!!」

影分身の俺が突っ込んで来た。

影分身「螺旋丸!!!」

影分身の俺は螺旋丸を俺に向けて来た。

俺も直ぐに術を発動させ、影分身の俺に向けて走った。

劉「千鳥!!!」

螺旋丸と千鳥がぶつかり合った。

ドッカーーーン！！！！！！

大きな爆発音が砂漠に響き、土煙が俺達を覆った。
俺は直ぐに距離を置き、違う術を発動させた。

劉「火遁・鳳仙火の術！！！」

俺は影分身の俺に火遁・鳳仙火の術を放った。
鳳仙火の術は影分身の俺の所に向かった。
だが、途中で消えてしまった。

劉「白眼！！！」

俺は即座に白眼を発動させた。
白眼で土煙の中を見る。
そこには、影分身の俺のチャクラと水のチャクラを持った何かが居た。

影分身「水遁・水龍弾の術！！！」

影分身の俺の声が聞こえると、土煙の中から水の龍が現れた。
俺は直ぐに千鳥を体に覆った。

劉「千鳥流し！！！」

俺は正面に千鳥を集中させ、防御した。

水の龍は千鳥流しによつて呆気なく消えた。
俺はそれを確認すると直ぐに武器を口寄せした。

龍「口寄せの術！！斬月！！」

俺の能力の一つにBLEACHの武器使用可能がある。
なので、俺は口寄せで武器を使用可能に出来るようにした。
さらに俺は卍解して天鎖斬月にし、影分身に構えた。
そうすると、俺の周りに黒のオーラの様な物が出てきた。
そして、俺はそのオーラを天鎖斬月に集中させ刀を素早く振った。

劉「月牙天衝！！！」

そうすると、天鎖斬月から黒の斬撃、月牙天衝が出た。

月牙天衝は影分身の俺の所まで向かっている。

しかし、月牙天衝は途中で凍った。

白眼で見してみると、影分身の俺の周りには氷の力が漂っていた。

そしてしばらくすると土煙が消え、影分身の俺の姿が見えた。

その姿は、氷の羽根を背中に持ち、氷の尻尾を持ち、右手は完全に氷になっており、手の部分が龍の頭になっていて、その手で刀を持っている。

影分身「卍解・大紅蓮氷輪丸」

影分身の俺はそう言った。

俺はもう一度天鎖斬月を構えた。

影分身も大紅蓮氷輪丸を構えた。

劉「月牙！！！」

影分身「無限!!!」

俺達は必殺技を放とうとした。
だが

p i p i p i p i p i (r y

特訓終了の合図が鳴った。

俺はそれを聞き、天鎖斬月を消した。

影分身の俺も卍解を解き、氷輪丸を消した。

影分身「今日は此处までだな。それじゃあ消えるぜ。」

劉「ありがとな。」

影分身「どういたしまして。」

影分身はそう言って消えた。

影分身が消えた事によって、俺に影分身の経験値がプラスされた。

劉「早く帰らないとはやてに怒られる。……俺は望む、八神は
やての家に転移する事を望む。」

俺は常識を操る程度の能力で、はやての家に転移した。

ヒューーン

劉「到着!!!」

俺は自分の部屋に移した。

外に移しても良かったのだが、外にはグレアムの使い魔が居るので外に移が出来ない。

俺は時計を見た。

六時十二分四十七秒

劉「はやてが起きるのは七時だから、風呂に入れるな。」

俺は着替えを持って風呂場に向かった。

劉「ふうー、気持ち良かった。」

俺は風呂に入り、汗を流した。

そして、時計を見た。

六時三十五分十九秒

劉「そろそろはやてを起こすか。」

俺ははやての部屋に向かった。

side out

side はやて

時計を見ると時間は六時十二分やった。

前までやったらこんな早く起きひんかった。

やけど、劉君がこの家に住み始めてからウチは早く起きるようにな

った。

劉君がウチの家に住み始めてまだ一週間しか経ってないけど、毎日が楽しくなった。

劉君が来る前まではウチは一人やった。

親も早くに死んで、ウチは一人やった。しかも、足は不自由で好きな所にも遊びに行かれへんかった。

ウチは神様を呪った。

やけど、神様はウチを幸せにしてくれた。

劉君に会わせてくれた。

劉君は初めて会ったウチに優しくしてくれた。

劉君と居ると心が落ち着く。

劉君はウチの傍に居てくれるって言うてくれた。凄く嬉しかった。

劉君が居てくれるならウチは何もいらへん。

ウチは劉君のことが・・・

コンコン

劉「はやて、起きてるか？」

そう思っとなら劉君がウチを起こしに来てくれた。

はやて「起きてるでー。」

ウチは元気良く返事をした。

劉「分かった、入るぞー。」

そう言っ劉君は部屋に入ってきた。

劉「おはよう、はやて。」

劉君が笑顔で挨拶してきた。

あの笑顔、毎日見とっても格好良いなあ／／／／／

はやて「おはような、劉君！」

そう言っつて劉君に抱きついた。

ウチが抱きつくと劉君はウチの事を抱き締めてくれた。

劉「朝から元気なお姫様だ。」

お、お姫様やなんて／／／／／

やっぱ、ウチは劉君のことが

好きなんや。

気付いた思い（後書き）

次回は未来のエース・オブ・エースと接触します!!

お楽しみに!!!

未来のEースと接触（前書き）

在り来たりだな・・・

誤字・脱字があれば教えてください

未来のEースと接触

side 劉

俺ははやてを起こした後、朝ご飯を作りキッチンに向かった。

基本、朝は俺の方が早く起きるので朝ご飯は俺が作っている。

転生する前からも料理は少しは作れていたので朝ご飯くらいは作れる。

はやてが時々「一緒に作ろう」と言うので、かなり今はしっかりした料理が作れる。

劉「ふうー、完成だ。」

今日の朝ご飯は、白米に味噌汁、魚にサラダといった和食を中心にしてみた。

はやて「劉くん、着替え終わったでー!!」

着替え終わったみたいだな・・・

劉「今から行くよ!!」

俺は、はやての部屋に向かった。

何故向かうかって？

理由は・・・

はやて「じゃあ頼むわ!」

劉「了解!」

俺がはやてをおんぶするためだ。

何故するのかと言うと、俺が提案したからだ。

夜天の書のバグがあるため、はやての足はバグを処理しない限り治らないが、筋肉を硬くしとくとリハビリの時にしんどいので極力車椅子を使わせたくない。

移動以外は基本一人でしているが、移動は俺がおんぶして移動している。

流石に、外出する時は車椅子だが・・・

劉「はやて、顔が赤いが大丈夫か？」

俺ははやての顔を見て聞いた。

はやての顔が何時もより赤かったので心配だ。

はやて「だ、大丈夫やから／＼／＼／」

はやては顔を赤くしながら答えた。

余り説得力が無いと思うが、はやてが大丈夫だと言っているから大丈夫だろう。

俺ははやてをおんぶしながらリビングに向かった。

はやて「美味い、劉君の料理はどんどん美味くなってるなあ。」

はやてがご飯を食べながら言ってくれた。

劉「そんな事ないさ、はやての教え方が上手だから俺でも美味しく作れるんだから。」

もし、夜天の書が無かったら料理の先生になってたかもしれないな。
はやて「ありがとうな。・・・あつ、そうや。今日は病院に行かな
らあかんねん。」

確かにハビリのためだったよな。

劉「分かった、俺も付いて行くよ。俺も本を買いに行く予定だった
し。」

はやて「ほんまか！？ありがとうな！！」

そこまで喜んでくれると俺も嬉しいぜ。

劉「さ、早くご飯を食べて病院に行こう。」

はやて「そうやな！」

そして、俺達は談笑しながら朝ご飯を食べた。

劉「はあー、まさかの売り切れかよ。トホホ・・・」

俺ははやてを病院に送った後、本屋に向かった。

だが、俺が買おうとした本はまさかの売り切れだった。

本屋で時間を潰すつもりだったので、持ち物は少しのお金だけだ。
このお金では買いたい物も出来ない。

なので、俺は海鳴市を適当に歩いている。

劉「ん？此処は・・・」

俺はある場所に立ち止まり、中を見た。

そこには、ベンチに座って泣いている女の子だけが居た。

劉「あの子・・・泣いてる。この時期に泣いてる子・・・！？まさか！！」

俺は急いで公園の中に入り、泣いてる女の子の所に向かった。

「・・・グスッ・・・グスッ」

劉「なあ、何で泣いてんだ？」

俺は泣いてる女の子に話し掛けた。

「・・・え？グスッ・・・あなたはだれ？」

いけね、また名前を名乗らずに話し掛けちゃった！
マジで気を付けよ・・・

劉「俺か？俺の名前は佐藤 劉だ。五歳をやってる。君は？」

俺は自己紹介し、泣いてる女の子に名前を聞いた。

俺の記憶が正しければ、この子は・・・

「・・・グスッ・・・わたしはなのは、たかまちなのは。ごさいなの。」

やっぱり・・・

- ・これが俺と未来のエース、高町なのはとの初めての出会いだった・

未来のエースと接触（後書き）

次回も在り来たりな話です

お楽しみに！！

TAKAMATHI NANOHA(前書き)

お久しぶりです!!

なんとか更新出来ました!!

相変わらず、ご都合主義・無理矢理ですが・・・

誤字・脱字があれば教えてください!!

今回も広い心を持って読んでください!!

TAKAMATHI NANOHA

side 劉

やっぱりなのはだったか・・・

なのは「グスツ・・・りゅうくんはわたしになにかようなの？」

なのはは泣きながら聞いてきた。

劉「嗚呼、何で泣いてんのかなあと思ってよ。」

まあ、少し前に地球の本棚で検索して調べたから知っていたが時期までは分からなかったんだよな。

なのは「グスツ・・・わたしはないてないよあ。」

泣きながら言われても説得力がないんだけどな。

劉「いいか、なのは。辛い時や悲しい時は誰かを頼りにしろ。俺達は子供なんだ。子供は、悲しい時や辛い時に誰かを頼りにしないといけないんだ。まだ会ってそんなに時間が経ってないが、俺はお前に頼りたい。だから、お前の泣いてる理由を聞かせてほしい。だからなのはは、自分が思ってる事を俺に言ってほしい。俺は全部受けとめてやる。だから俺を頼ってくれ、なのは。」

なのは「グスツ・・・いいの？なのはめいわくかけるかもしれないよ。」

五歳児が迷惑を掛ける事を気にするとか、かなり追い込まれていた

んだな・・・

劉「大丈夫だ！！さっき言っただろ？全部受けとめてやるって！！だから、お前が思ってる事を全部俺に言っちまえ！！」

俺がそう言っとなのはは俺に抱きついてきた。

なのは「グスツ・・・あのね、おとうさんがけがしちゃったの。それでね、おかあさんは、おしごとがたいへんなの。おにいちゃんは、すぐおこつててこわいの。おねえちゃん、いつもおとうさんのおみまいにいつてるの。だからなのははひとりなの。」

なのはは泣きながら家の事を話してくれた。

俺はなのはの頭を撫でながら話を聞いた。

なのは「グスツ・・・それでね、なのははいつもひとりなの。なのははいいこにならないとだめなの。なのははひとりでもだいじょうぶなようにがんばったの・・・でも」

なのはは更に泣きだした。

なのは「グスツ・・・なのは、さびしかったの。でも、おかあさんたちはたいへんだからいつしよにあそべなかったの。」

劉「分かった、今までよく頑張ったな。でも大丈夫だ。なのはは一人じゃない。俺がついてる。なのはが寂しいと思ったら一緒に居てやる。なのはが辛いつて思ったら俺が代わりにやってやる。だから・・・今は泣いとけ。」

なのは「う、うわああああああん！！！！！！さびしかった

よお！！！！つらかったよお！！！！」

俺がそう言うとなのはは大声を出して泣きはじめた。
俺は、なのはの頭を撫でながらなのはが落ち着くのを待った。

なのは「うわあああああああん！！！！！！」

なのは「・・・ありがとうね、劉君。」

なのはは泣き止み、笑って俺にお礼を言ってきた。

劉「なのはの笑顔は可愛いな。」

なのは「ふえっ！？／／／／／／／／」

なのはは顔を赤くして驚いた。

はやての笑顔も可愛いが、なのはの笑顔も可愛いぞ。
ユーノが羨ましい。

まあ、誰が誰に恋をしようと自由なんだけどな。

なのは「あ、ありがとうなの。／／／／／／／／」

なのはは顔を赤くしてお礼を言ってきた。

劉「やっぱ可愛いぞ。将来は美人になるな！」

StrikerSのなのはは美人だったからなあ。
ユーノとは結婚しなかったけどな・・・

なのは「／／／／／／／／／／」

ん？

なのは「／／／／／／／／／／」

なのはが動かないぞ・・・

劉「おい、なのはー？」

俺はなのはの名前を呼んだ。
だが、反応はなかった。

なのは「／／／／／／／／／／」

ヒューン

劉「危ねえ！！！！」

なのはが倒れそうになったので抱き締めた。

なのは「ボンツ！！！！／／／／／／／／／／」

なのはの頭から煙が出た。

頭から煙が出る人、初めて見た。

よく見たらなのはは気絶してるよ・・・

劉「何で気絶したかは分からんが、なのはをこのままにしとくのはマズイし・・・俺が連れて行くか・・・あつ、はやての迎えにも

行かないとな。……先にはやてを迎えに行くか。」

俺は、なのはをおぶってはやての居る病院に向かった。

side out

side はやて

はやて「遅いなあ、劉君。」

今日は何時ものリハビリが早く終わった。

やから、受け付けで劉君を待つとる。

……早く会いたいなあ。

！？

はやて「な、何や！？嫌な予感がする……劉君か？」

劉君の事を好きになった女の子が出来た様な気がする……

劉君は誰にも渡さへん！！

劉君はウチとその……けっ、結婚するんやから！！！！！！

で、でも誰が劉君の事が好きなんやろうか？

あー、めっちゃ気になる！！

迎えに来たら話してもらって、劉君！！

side out

side 劉

ブルッ！！

劉「何だろう、今凄くヤバイフラグが建ったような・・・」

まさかはやてか？

よく考えろ、俺。

はやてはそんな子じゃないだろ！！

はやてを信じる！！

なのは「うーん、むにゃむにゃ・・・りゅうくん」

劉「何だなのh・・・寝言か・・・必ずお前を一人にしない。だから、安心してくれ。・・・なのは。」

俺はそう言っ、はやてが居る病院に向かった。
嫌な予感を心配しながら・・・

TAKAMATHI NANOHA（後書き）

次回はこの小説初のオリジナル展開？です

楽しみに！！

意志達の話し合い（前書き）

これからもっともっとオリジナルの話を考えていきます

もし、変な所があれば教えてください

誤字・脱字などあれば教えてください

意志達の話し合い

転生者達が、我らの世界に来たようだ・・・

嗚呼

しかも奴らは、原作を変えている

忌々しい転生者達目が！！！！

ですが転生者達のお陰で今現在、助けられた人達もいるのですよ

確かな・・・

騙されるな！！！！

奴らは私利私欲の為に、人を助けた！！！！

そうだ、人間は何時でも、どんな時でも私利私欲の為にしか動かない！！！！

奴らには死を与えなければならない！！！！

このまま奴らの好きな様にさせていたら、必ずイレギュラーが発生する！！！！

確かにそうだが、どうやって奴らを殺すのだ？

奴らは神・アフロディから貰った力がある

ちょっと待ってください！！

何故転生者達を殺そうとしているのですか！？

彼らは、神・アフロディのミスによって死んでしまったのですよ！！

なのに彼らは、私利私欲の為ではなく他人を助ける為に力を得た

そんな彼らをどうして殺そうとするのです！？

お前、転生者達の味方になるのか！？

考え直せ！！

転生者達は必ず本性を見せる！！

奴らの味方になったって、お前の立場を悪くするだけだ！！

結構です！！

私は彼らの味方になります！！

私は彼らの下に向かいます！！

や、止めるんだ！！

そんな事したら、お前は二度と帰ってこられなくなるぞ！！

構いません！！

私には、“殺す”という選択肢はありません！！

私は彼らを信じます！！

さよなら！！

ま、待つんだ！！

転移！！！！

待て――！！！！！！

畜生！！

絶対に転生者達を殺してやる！！

おい、俺と一緒に転生者を殺すっていう奴は居るか！？

俺はやるよ

俺もだ

オイラも！

そうか

・・・爺さん、お前はとうするんだ？

まあ聞かなくても答えは決まってるか
爺さんも俺達と来るだろ？

否、ワシは転生者達を信じてみようと思う
じゃから、お主達には協力できん

な！？

あ、アンタも転生者を信じんのかよ！？

・・・そうじゃ

！？

もう良い！！

行くぞ、お前等！！！！

お、おう

わ、わかった

りよ、りようかい

フン

爺さん、俺達に付いてこなかったことを後悔するんだな
転移！！！！

・・・後悔はせぬ

ワシは転生者達を信じておる
じゃが

あやつらの実力は相当のものじゃ

転生者の力を利用して○○○○するかもしれないな

・・・ワシも転生者と接触するかのお

あの子が向かった転生者の名前は・・・

佐藤 劉、か

ならワシは、津田 遊星と言う転生者の所にでも向かうかのお
転移！！

意志達の話し合い（後書き）

次回は少しだけオリジナルな話です

お楽しみに！！

なのはをお誘い（前書き）

やはり小説を書くのは難しいです・・・

今回も広い心を持って読んでください！！

変な所・誤字・脱字があれば教えてください！！

なのはをお誘い

side 劉

はやて「劉君、その子は一体誰なんや？」

はやてが笑顔で聞いてきた。

怖い、笑顔だが目は笑っていない。

嘘なんか吐いたら何されるか分かったもんじゃない・・・
正直に話すか。

最初に言っておく！

はやての笑顔を見て話そうと思ったわけじゃないからな！
俺は最初から話すつもりだったからな！

・・・俺、一体誰に話してんだろ。

劉「実はな、はやて・・・」

(説明中)

・・・ってな事があったんだ。だからなのは俺がおんぶしてるんだ。分かってくれたか？」

俺は、今日有った事を全部話した。

流石になのはをおんぶした状態で話せないので、病院の椅子に座って話した。

なのはは椅子に寝かせている。

はやては俺の話を聞き終わると頭を抱えて何か考えていた。何を？

はやて「決めたで！！」

突然はやてが大声を出して言った。

俺は受け付けの看護婦さん達に謝った。

だから何を？

はやて「今日、なのはちゃんをウチの家に泊りに来てもらおう！！そうすれば、なのはちゃんは淋しい思いせんでもええしな！！決まりや！！」

良いのか、勝手に決めちゃって？

と言うか、まだなのはの母さんに聞いてないから分からないぞ。

劉「はやて、まだなのはを家に連れて帰ってないんだぞ。勝手に決めたらダメだろ？」

はやて「やったら許可を貰いに行こ！！モタモタしてられへん！！」

もう何を言っても止められないな。
はぁ・・・

はやて「劉君！！早く早く！！」

劉「分かったよ！」

俺はなのはをおんぶして、はやてと一緒になのはの両親が経営している翠屋へ向かった。

劉「これが翠屋のメニューか」

はやて「なんか美味しそうなメニューばかりや・・・」

はやてはメニューを見ながら涎を垂らした。
俺はハンカチではやての涎を拭いた。

劉「涎は垂らすなよ、はやて。」

はやて「あ、ありがとうな／＼／＼／」

はやては顔を赤くしながらお礼を言ってきた。
俺達はあの後、翠屋に無事に着いた。

その時になのはが目を覚ました。
そして、顔を赤くしてお礼を言ってきた。
何で顔が赤かったのかは分からんがな。
なのはとはやては直ぐに仲良くなった。

その後、翠屋に入つてなのは母さんの所へ行き、俺とはやてはテーブルに座つた。

ちゃんとはやても翠屋の椅子に座らせた。

そして昼ご飯を此処で食べるため、メニューを選んでゐるわけだ。時刻は午後二時過ぎ。

店の客も少ない。

しかし、何を食べようか・・・

「少し良いかしら？」

突然話し掛けられた。

俺はその声の主の所へ視線を移した。

そこには、なのはと一人の女性が立っていた。

俺はその女性が誰だか直ぐに分かつた。

なのはの母親である、高町 桃子さんだ。

劉「俺に何か用ですか？」

桃子「少しお話があるの。一緒に来てくれるかしら？」

O・H A・N A・S H Iだと!?

俺って何かしたか!?

だ、だが、逃げたらO・H A・N A・S H I以上の事をされてしま
う・・・

大人しく付いていくか。

劉「分かりました。悪いな、はやて。少し行ってくるわ。」

はやて「分かつたわ。」

はやてにそう言って俺はなのはと桃子さんに付いていった。

桃子「まずは自己紹介をさせてね。私はなのはの母親である高町桃子よ。」

桃子さんが自己紹介してきた。
俺もした方が良さそうだな・・・

劉「俺の名前は佐藤 劉です。なのはと同年です。」

俺も自己紹介した。

さて、こっからが本題だ。

マジで何でO・H A・N A・S H Iされなきゃダメなんだ？
・・・分らん。

桃子「ありがとう。」

桃子さんは頭を下げ俺にお礼を言ってきた。
Why?

劉「何で俺にお礼を言うんですか？俺と桃子さんは今日会ったばかりですよ。お礼を言われる理由が分かりません。」

俺は桃子さんに言った。

桃子「貴方はなのはを助けてくれたんでしょ？だからお礼を言うてるの。」

成る程、理解したぞ。

つまり、桃子さんはなのはを助けてくれたから俺にお礼を言ってるのか。

納得納得

劉「俺がしたかったからしただけです。別にお礼を言われるくらいの事を俺はしてません。」

人を助ける事をするのは当たり前前的事だ。
助けたいから助ける、助けれるから助ける
これが俺のモットーだ。

桃子「それでもよ。本当にありがとね。」

永遠にループしそうだな・・・
素直に受け取っとくか。

劉「どういたしまして。」

俺がそう言つと桃子さんは笑顔になった。

だが、これは完全な笑顔じゃない。

やはり、なのはの父親の高町 士郎さんの事で頭が一杯なんだろう。

・・・俺が治すか。

俺達と言うイレギュラーがいるから、原作通りに進むかどうかも分からない。

もしかしたら、士郎さんが死んでしまいかもしれない。

俺の力なら士郎さんを救えるはずだ。

・・・そうだ

劉「なのは？」

なのは「どうしたの、劉くん？」

はやてに頼まれてた事を聞いとかないとな。

劉「今日、俺の家に泊りに来ないか？」

なのはをお誘い（後書き）

次回はお泊り会です

お楽しみに！！

お楽しみのお泊り会（前書き）

オリジナルの話を考えるのは難しいです

でも、頑張ります！

今回も、心を広く持って読んでください

桃子さんは、俺の話を真剣に聞いてくれている。

なのはは、何を話しているのか気になって顔をしていた。

劉「なのはは淋しかったんです。幾らなのはの気持ちを理解しても、大変なのは変わりが無いでしょ？だから、俺の家に泊まってもらいたいです。少しでも、なのはが孤独の辛さを忘れてほしいんです。」

俺はそう言い終わるとさつき座っていた場所に戻って座った。

桃子さんは、なのはと俺を見ながら悩んでいた。

そして、俺の顔を見て笑った。

桃子「分かったわ。なのはの事をお願いするわね。なのはも、それで良いかしら？」

桃子さんは俺に頼むと、横に座っていたなのはに聞いた。

なのはは顔がまだ赤かったが首を縦に振ってくれた。

良かった、はやてが喜ぶぞ！

劉「それじゃあ、俺ははやての所に戻ります。はやてにも伝えないと。」

俺はそう言って立ち上がり、その場から離れた。

はやて「ん？・・・お帰り、劉君！どうやった？なのはちゃんは泊りに来るんか？」

はやては、オムライスを食べながら聞いてきた。
俺ははやての向かい側に座った。

劉「嗚呼、今日なのはが泊りに来るぞ。」

俺は水を飲んでそう言った。

はやては凄く嬉しそうに顔をしながらオムライスを食べだした。
やはり、同じ年の女の子の友達が来るのは嬉しいんだろ。

まあ、俺も同じ年だが男だからな。

女の子同士じゃないと出来ない話だってあるしな。

・・・それより、腹減った・・・

なのは「りゅ、劉くん！劉くんが頼んだお子様ランチだよ！！／／
／／／／」

なのはが、顔を赤くしながら俺の頼んだお子様ランチを持ってきてくれた。

本当はもつと違うものを食べたかったんだが、見た目が見た目なのでこれを頼んだ。

しかし、何故顔を赤くしなきゃなんだ？

はやて「なのはちゃん！今日待ってるで、なのはちゃんが来るのを
！！」

はやてがなのはに言った。

・・・オムライスを既に食べ終わっていた。

・・・何時も思っているが、はやての食べるスピードは速いよな。

何処にそれだけの量を入れられる場所があるんだ？

まあ“知らぬが仏”って言う言葉もあるし、聞かない方が良かったらう。

なのは「えっ？はやてちゃんも劉くんのお泊りするの？」

・・・あつ、言つてなかった。

あの時は、O・H A・N A・S H I されないと言う安心感でその事を言うのを忘れてた。

劉「なのは、俺ははやての家に居候してるんだ。だから、俺の家ははやての家なんだ。」

$$\vdots$$

•
•
•
•

•
•
•
•
•
•

.....

なのは「ふええええええええええええ！！！！！！？」」

なのはが大声を出して驚いた。

やっぱ驚くよな・・・

反省しないとな。

劉「悪い。言うのを忘れてた。」

俺は頭を下げた。

悪い事をしたら素直に謝る。

なのは「い、良いよ、別に!!! ちよ、ちよつと驚いただけだから・・・」

・頭を上げてよ、ね？」

なのはが俺にそう言ってきた。

なのはは優しいよな。

本当にこんな優しい子が辛い思いをさせたくない。

・・・頑張るか。

劉「ありがとな、なのは。」

俺はなのはにお礼を言った。

お礼を言う時は笑顔で言った。

そうすると、なのはとはやての顔が赤くなっていた。

・・・何で？

なのは「そ、それじゃあ、今日お泊りさせてもらっね／＼／＼／＼／」

はやて「う、うん。ま、待つとるわ／＼／＼／」

これで良かった、なのはの辛い過去を変えられて・・・

誰も悲しむ必要なんて無い。

俺は、皆に笑っていてほしい。

その為に、俺はどんな敵でも戦う。

例え、俺が死ぬようなことになっても・・・

side――

私は、近くのテーブルで彼の心を読んでみた。

やはり、彼は私が思った通りの人間ですね。

彼なら、これから起こる様々な戦いや出来事を変えてくれる筈です。
私は、彼をあの人達から護ってみせます。
これが私の、私なりの世界の意志です！！
私は、テーブルに代金を置いてそこから立ち去った。

side 劉

あれから俺とはやては、一度家に帰った。
なのはが泊りに来るので、色々と準備が必要だからだ。
まあ準備と言ってもする事は決まっているんだがな。
はやては、凄くそわそわしていた。
凄く楽しそうな顔をしていた。
その姿が凄く愛くるしかった。
俺は時計を見た。
午後六時十三分四十二秒
そろそろ来るな。

ピンポン

呼び鈴が鳴った。

はやて「来たで！！さ、劉君！！なのはちゃんをお出迎えに行こ！！」

はやてが俺の服を引っ張りながら言ってきた。
はやての目は、凄く輝いている風に見えた。

俺は、はやてをおんぶして玄関に向かった。

なのは「きよ、今日はお世話になります!!」

桃子「劉君、はやてちゃん、なのはの事をお願いね。」

扉を開けると、なのはは頭を下げ俺達に言ってきた桃子さんは俺とはやてになのはの事を頼んできた。

劉「分かりました。」

俺はそう言っとなのはを家に入れた。

桃子さんは、何度も俺達に頭を下げ帰って行った。

さて、賑やかになるぞ!!

お楽しみのお泊り会（後書き）

次回は、士郎の怪我を治す話になります

次回もお楽しみに！！

TAKAMATHI SHIROU(前書き)

話が思い付かなかった・・・

本当にすいません

誤字・脱字があれば教えてください

TAKAMATHI SHIROU

side 劉

お泊り会から三日が経った。

あれから、俺達はなのはとよく遊ぶ様になった。

俺とはやてがなのはの家に遊びに行くか、なのはが俺達の家遊びに来ると言う事をしている。

なのはの顔から、孤独の辛さや淋しさの気持ちが消えて今はずっと笑っている。

はやても、今まで以上に楽しそうに笑っている。

だが此処最近、誰かに見られている様な気がする。

俺が外に出ると、誰かの視線を感じる。

昨日地球の本棚で検索したのだが、検索できなかった。

何故だか分からないが、検索しようとすると地球の本棚から強制的に出される。

なので、誰が俺を見ているのか分からない。

まあ何もしてこないのだから、趣味の悪い野郎が俺を付けているのだろう。

危険は無いと思うが、なのははやてに手を出したら・・・ぶっ潰す！！

さて、この話はこれくらいで良いだろう。

今の時間は深夜一時二十三分四十五秒

俺は今、ある病院に来ている。

こんな時間帯に病院に来たのには理由がある。

高町 士郎さん

士郎さんはこの病院で入院している。

俺は、士郎さんの怪我を治す為に病院に来た。

原作通りなら士郎さんは無事に怪我は完治する。

だが、俺と遊星と言うイレギュラーが存在するので原作通りに進む

か分からない。

もしかしたら、士郎さんが死んでしまう可能性がある。
そんな事が起これば、なのはの心は完全に壊れてしまう。
俺はそれを防ぐ為に病院へ来た。

劉「・・・此処だな。」

俺は士郎さんの居る病室に着いた。

俺は見回りに来る看護士さん達に姿を見られないように、常識を操って“俺が望めば俺の姿を透明にする常識”を作った。

この力のお陰で、俺は誰にも見つからずに病室に来れた。

俺は病室の扉を音を立てずに開けた。

そこには、ベッドに死んでいるかの様に眠っている男の人・高町

士郎さんが居た。

俺は士郎さんに近付き、士郎さんの体の状態を調べた。

劉「・・・怪我は少しずつ治ってきてるが、完治するには後四ヶ月が必要か・・・」

士郎さんは死なないと言う事実を知り、喜びと悲しみの感情が心から溢れてきた。

喜びは、士郎さんが無事に治る事。

悲しみは、四ヶ月もずっと眠り続ける事。

四ヶ月・・・

劉「俺は望む。“高町 士郎さんの怪我を完治させる事”を望む。」

俺はそう言つて士郎さんの左腕に触れた。

すると、士郎さんの怪我が少しずつ治っていった。

俺自身、魔力が無いので管理局にこの事がバレる事は無い。

俺の力は、俺の体力を消費して使える。

そして暫くすると、士郎さんの怪我が完治した。

士郎「・・・う、うう・・・此処は？」

怪我が完治すると、士郎さんが目を覚ました。

そして士郎さんは、俺を見てきた。

劉「初めまして、高町 士郎さん。」

俺は笑顔で士郎さんに言った。

だが士郎さんは、俺を真剣な目で警戒しながら見てきた。

劉「心配しないでください、俺は貴方の怪我を治しただけですから。」

士郎「・・・怪我を治してくれた事には感謝する、ありがとう。だが、何故君は私を治したんだ？君と私は今日初めて逢ったんだよ？」

俺がそう言つと士郎さんはお礼を言つてきて、何故怪我を治したのを聞いてきた

何故つて・・・

劉「なのはが俺の親友だからですよ。」

俺はそう言つて、今までの出来事・高町家の状況・高町家の人の状態を士郎さんに話した。

士郎さんは、黙つて俺の話聞いてくれた。

俺が全てを話し終わると、士郎さんは目を瞑った。

多分、話を整理してるのだろう。

士郎「私が眠っている間に、そんな事が・・・」

士郎さんの目から、涙が出ていた。

俺は士郎さんに、ハンカチを渡した。

士郎さんは、ハンカチを受け取って涙を拭いた。

士郎「ありがとう・・・君の名前を覚えてくれないか？」

士郎さんが、俺に名前を聞いてきた。

俺が名前を言おうとした時、誰かがこの病室に近付いてきた。

劉「この病室に誰かが来たので、また話に来ます。俺はなのはの親友なので、翠屋で会えます。無事に退院してくださいね！！」

俺はそう言って窓を開けて、下に飛び降りた。

士郎さんが何か言っていた気がするが、早く帰らないとはやてにばれてしまう。

俺は急いで家に向かった。

TAKAMATHI SHIROU(後書き)

次回は士郎と劉の話し合いです

次回もお楽しみに!!

士郎と話し合い（前書き）

バイトが大変です

一日8時間労働

マジで疲れました

誤字・脱字があれば教えてください

士郎と話し合い

side 劉

俺は今、高町家の道場に士郎さんと向かい合わせに座っている。

何故なら、士郎さんに呼び出されたからだ。

何故呼び出された説明するぜ。

士郎さんの怪我を治したので、士郎さんは次の日に退院した。

士郎さんが退院した日は、なのはが凄く喜んでいたのを憶えてる。

そして士郎さんが退院した日に、俺とはやては高町家に遊びに行った。

そしたら、士郎さんの元気な姿が見れた。

桃子さんは、目に涙を溜めていた。

他にも、俺より年上の男女が居た。

多分、恭也さんと美由希さんだろう。

何故かは分からないが、恭也さんは俺を真剣な目で見てきた。

何故かを考えてると、士郎さんに呼び出された。

多分、否、確実に俺の力の事だろう。

だから俺は、素直に士郎さんに付いていった。

そして最初に至る。

士郎「まず、君の名前を覚えてくれないか？あの時は、結局教えてもらえなかったからね。」

士郎さんにそう言われたので、俺は頷いた。

劉「俺の名前は佐藤 劉。なのはと同じ年です。」

士郎「劉君……か。劉君、最初にお礼を言わせてくれ。私の怪我を治してくれて、なのはを支えてくれて、本当にありがとう。」

士郎さんは、俺に頭を下げてお礼を言ってきた。

劉「頭を上げてください。俺が好きで勝手にやった事ですから。」

俺がそう言つと、士郎さんは頭を上げてくれた。

しかし、士郎さんは納得がいかない顔をしていた。

このままじゃ、無限ループになってしまう・・・

劉「士郎さん、俺の力に付いて話します。・・・この事は他言無用
でお願いします。」

俺がそう言つと、士郎さんは真剣な顔になった。

俺は一度、深呼吸をした。

・・・避けられても、虐待されても良いように、話している途中で
覚悟しないとな。

劉「実は俺は・・・

（説明中）

・・・これが俺の秘密です。」

俺は全てを話した。

俺は一度死んだ存在だと言う事。

俺は神様のお陰で、力を手に入れた事。

俺は神様の力で、この世界に転生した事。

俺の秘密を全て、士郎さんに話した。

話している途中で避けられても良いように、虐待されても良いように、どんな事をされても良いように覚悟した。
俺は、そうされてもしょうがない人間なのだから・・・

士郎「・・・そう、か・・・劉君。」

士郎さんは、俺に手を近付けてきた。

俺は目を瞑り、殴られても良いように覚悟した。
だが、殴られる痛みは来ず、頭を撫でられる感覚が来た。
俺は目を開けると、士郎さんが俺に頬笑みながら頭を撫でてくれていた。

士郎「私に辛い話をしてくれたね。本当にすまない。そして、全て

を話してくれてありがとう。」

劉「し、信じてくれるんですか！？お、俺が嘘を吐いてるのかもしれないんですよ！？」

こんな話をして、普通は信じてもらえない。

なのに、士郎さんは信じてくれた・・・

何で？

士郎「私は劉君の力のお陰で今此処に居るんだ。それに、君の目は嘘を言っていない。だから信じるんだ。」

士郎さんはそう言って笑ってくれた。

俺は士郎さんの笑顔を見て、涙が出そうになった。

だが、俺は涙を堪えて短く「ありがとうございます」と言った。

士郎「この事を知っているのは、私だけなのかい？」

士郎さんが聞いてきたので、俺は頷いた。

すると士郎さんは、もう片方の手で頭を押さえ何かを考え始めた。そして少しすると、士郎さんは俺を真剣な目で見てきた。

士郎「今、秘密を言えとは言わない。・・・だけど何時か、なのはとはやてちゃんに、劉君の事を話してあげてくれないか？二人は優しい子だ。絶対に劉君を貶したりはしない。」

士郎さんは俺にそう言ってきた。

・・・何時迄も秘密にしておくのは嫌だ。

だけど、今の関係を壊したくない。

俺は士郎さんに「何時か必ず話します」と言った。

士郎さんは「そうか」と言った。

そして、話し合いが終わったのでリビングに戻った。

・・・何時か必ず話す。

俺はそう心に決めた。

side 三人称

謎の黒い空間・・・

その場に、数人の男が立っていた。

すると突然、一人の男がその場から消えた。

その場に残された男達は、不気味な笑みを浮かべていた

士郎と話し合い（後書き）

次回はほのぼのした話です

次回もお楽しみに！！

久しぶりの再会（前書き）

夏休みの宿題が終わりません

夏休みの宿題を頑張らないと、マジでヤバくなりそうです

更新はさせたいですが、出来なかったらすいません

久しぶりの再会

side 劉

劉「行ってくるよ。」

はやて「気を付けてなあ。」

劉「嗚呼。」

俺ははやてに挨拶をして、家を出た。

家を出て直ぐにグレアムの使い魔に睨まれたが、俺は無視して近くの山に向かって走りだした。

何故今日、近くの山に向かっているのかと言うと、今日は久々にアイツ（・・・）と会う為である。

今日は家に呼んではやて達に紹介しようと思ったのだが、俺に向けられる視線が最近酷くなってきた。

何処でどうやって俺を見てるのか分からないのに、アイツ（・・・）を呼ぶ事は出来ない。

なので、無人世界に行ってアイツ（・・・）と会う事にした。

・・・集合時間が近付いてきたな、少し本気で走らないと間に合わないな。

急ごう！！

俺は少し本気で走って、近くの山に向かった。

劉「フウ・・・、今からなら間に合うな。“遊星が居る無人世界に転移する事を望む”。」

俺は力を使って、俺の親友である遊星が居る無人世界に転移した。

side――

彼・佐藤 劉君は、同じ転生者である津田 遊星君に会いに行った。
私は、彼をずっと観察していた。

彼は何時も、と言っても少ししか見ていないが、誰かの為に力を使っていた。

彼は私利私欲の為に力を使うのではなく、誰かを護れる力を獲る為に使っていた。

津田 遊星君も、きっと誰かを護る為に力を使っている筈です。

・・・彼らは、決して存在を否定される人間ではありません。

私が、彼ら（・・・）から二人を護らなければ！！

「劉君が無人世界に着いたみたいですね。・・・私も行かなければ。」

私はそう行つて、足元に魔法陣を出現させた。
そして・・・

「転移！！」

私は劉君の後を追った。

side三人称

此処は無入世界。

無入世界とは文字の通り、人が一人も存在しない世界。

だが、その世界に一人だけ、しかも一人の少年がその世界に居た。その少年は、地面に座って目を瞑り、誰かを待っていた。

「・・・・・・・・」

少年はゆっくり目を開けて、立ち上がってズボンに付いた砂を払った。

すると、少年の前に一つの魔法陣が現れた。

そして、その魔法陣は光り始めた。

「やっと来たな。」

少年は溜め息を一つ吐いて、そう言った。

そして光りが納まると、一人の少年が立っていた。

「・・・・・・・・久しぶりだな、遊星。」

その少年は目の前に居る少年・津田 遊星にそう言った。

遊星は、頭を掻きながらも笑った。

遊星「遅刻だぜ、劉。まあ、別に気にしてないけどな。」

遊星は目の前に居る少年、佐藤 劉にそう言った。

劉「気にしてないなら言うなよ。・・・・・・・・久しぶりだな、遊星。」

劉は、遊星に手を出してそう言った。

遊星も、劉の手を握って笑った。

遊星「久しぶりだな、劉！」

二人の転生者、佐藤 劉と津田 遊星は久しぶりに再開した。

久しぶりの再会（後書き）

次回は戦うまでの話です

次回もお楽しみに！

謎の敵の出現（前書き）

無事に投稿出来ました！

でも、夏休みの宿題はまだ終わってません

本当にヤバいな・・・

今回も広い心を持って読んでください

誤字・脱字があれば教えてください

謎の敵の出現

side 劉

俺は遊星と握手をした後、近くに有った岩の上に座って遊星が今までの事を話し終わった後、俺は今までの事を遊星に話した。

はやてと接触してはやての家でお世話になってる事・なのはの心の傷を俺とはやてが支えて癒した事・なのはの父さんである高町 士郎さんの怪我を治し俺の秘密を話した事・最近、誰かに観察されている事を全部遊星に詳しく話した。

遊星「なる程な・・・。しかし、お前も誰かに観察されてるなんてな・・・。」

劉「な！？お前もなのか！？」

遊星の言った言葉に、俺は立ち上がり大声を出して驚いた。

俺だけじゃなくて、遊星も誰かに観察されてるなんて・・・

遊星はスカリエッティの所に居るから、簡単に見つかる事は普通は無い。

だが、遊星は実際に観察されている事を実感している。

俺と遊星・・・

俺達の共通点は

人間

否、これは俺達だけじゃなくて皆の共通点だ。

男

否、これも俺達だけじゃなくて男全員の共通点だ。

転生者

こ、これか！？

劉「転生者である俺達を、誰かが観察してるって訳か？」

俺がそう聞くと、遊星は頭を縦に振った。

だが、何故俺達が転生者だって事を知ってるんだ？

俺達が転生者だって事を知ってるのは、俺達を転生させてくれたアフロディ・遊星の事は知らないが俺が唯一転生者の事を話した高町士郎さん・俺の事は知らないが遊星が唯一転生者の事を話したジエイル・スカリエッティ。

この三人しか、俺達が転生者だと言う事は知らない。

なのに、一体誰が・どんな方法で・どうやって・何故観察しているんだ？

・・・分かんねえ！！

俺はもう一度岩に座って遊星を見た。

遊星「俺も脳をフルに使って考えたが、全く分かんねえ。地球>ほしくの本棚で検索しようと思っても、強制的に地球>ほしくの本棚から出される。劉もだろ？」

遊星が聞いてきたので、俺は無言で頷いた。

俺の地球>ほしくの本棚だけじゃなくて、遊星の地球>ほしくの本棚でも俺達を観察してる奴等を検索出来ないなんて・・・

遊星「今はまだ接触や攻撃も無いが、油断は禁物だぜ、劉。」

劉「そうだな。・・・もし奴等が、俺達の仲間に手を出したその時は・・・」

遊星「高町流 O・H A・N A・S H I をしてやるさ。」

なのは「クシュン！！誰かがなのはの事を噂してるのかな？」

遊星がそう言うのと翠屋で働いてる子が噓した様な気がするが、気にせずに俺は遊星の言葉を肯定した。

遊星「・・・そうだ、劉、お前にこれを渡しておくよ。」

遊星はそう言ってズボンのポケットから黒い折り畳み式の携帯を俺に渡してきた。

劉「これは？」

遊星「これは、俺とスカリエッティが共同開発をして作った劉専用のデバイスだ。俺達には魔力などは0、全く無い。なのに、デバイス無しで能力を使っていたら管理局の上層部が見つかる。だから、デバイスを作ったのさ。でも、性能は他のデバイスよりかなり有能だぜ。まあ俺は、劉のと違って色違いの白だけだな。」

遊星はそう言うと白の折り畳み式の携帯を出して俺に見せてきた。

劉「これを使えば、遊星と何時でも・どんな場所でも通話ができるのか？」

遊星「勿論！俺の能力とスカリエッティの科学の力を使って完成した携帯だぜ。」

遊星は笑いながら言ってきた。

これは便利だな。

これを使えば、何時でも遊星と情報交換が出来る。

俺は黒の折り畳み式の携帯を自分のズボンのポケットに入れた。

劉「ありがとな、遊星。」

俺がお礼を言っていると、遊星は笑いながら「どういたしまして！」と言ってくれた。

さて、此処に来て大分時間が経ったな。

そろそろ帰らないと、はやてが心配する。

劉「遊星、そろそろ帰るわ。はやてが心配するしな。」

遊星「おう、お前に好意を持つてるはやてが待ってるんだからな！」

・・・遊星、何勘違いしてるんだ？

劉「遊星、はやては俺の大切な家族だ。それに、はやてが俺に持つてる好意は家族としての好意だ。そののを間違えないでくれ。」

俺がそう言っていると、遊星は手に頭を置いて深い溜め息を吐いた。

何で溜め息を吐いたんだ、しかも深い溜め息を？

遊星「鈍感」

劉「俺は敏感だ。そこも間違えるな。」

俺は遊星の言葉を否定して、遊星に念を押した。
すると遊星はまた、深い溜め息を吐いた。

溜め息と吐くと幸せが逃げるぜ・・・ってはやてが言ってた。

遊星「こりゃ波乱の戦いが思い浮かぶ。」

劉「俺達がそんな事をさせる訳ないだろ？」

遊星「否、俺はこの波乱の戦いはノータッチだ。劉一人で解決させる。お前が原因になるんだからな。」

俺が原因の波乱の戦い？

まあ解決させてやるさ、頑張つて。

劉「じゃあ帰るわ。」

俺は足元に魔法陣を出現させた。

「帰ってもらっちゃ困る。今からが楽しくなるのに。」

！？

俺は魔法陣を消し天鎖斬月を出し、遊星は死ぬ気のグローブと死ぬ気丸を創り出して身構えた。

すると俺達の前の光景が歪みだした。

そしてその歪みから、一人の謎の男が現れた。

・・・誰だ、コイツは？

遊星「・・・俺達に一体何の様だ？」

遊星は殺気を放ちながら目の前の男に聞いた。

初めて会った時より更に強くなったんだな、遊星。

まあ俺も真面目に修業してるがな。

俺も殺気を目の前の男に放ちながら見た。

「・・・やはり、お前達はこの世界にとって忌むべき存在。お前達
は我ら世界の意志が存在を消し、お前達の所為で変わったこの世界
を修正しなければならない！！」

男は俺達にそう叫んで、一本の白い長剣を出した。

その白い長剣には、アルファベット版デジモン文字が刻まれていた。

劉「オメガブレード・・・」

ファイターモード

インペリアルドラモンFMがオメガモンの力を受け継いで、インペ
リアルドラモンPMになった時に使う武器・オメガブレードを男は
持っていた。

パラディンモード

遊星「気を付けろ、劉。オメガブレードの能力は「知ってるよ、怖
い程な。」そうか。だが、本当に気を付けろ。アイツは只者じゃな
いぜ。」

劉「此处に居る時点で、アイツは只者じゃないだろ。」

俺は遊星にそう言うと、遊星は死ぬ気のグローブをはめ、死ぬ気丸を飲み込んで額から死ぬ気の炎を出した。
しかも、ハイパー死ぬ気モードだった。

「世界の修正を！！」

劉「行くぞ、遊星！！」

遊星「嗚呼！！」

俺達と謎の男の戦いが始まった。

謎の敵の出現（後書き）

次回は初の戦闘

上手く表現が出来たら良いな

次回もお楽しみに！！

究極の呪い……（前書き）

一日遅れてすみません

夏休みの宿題をしていたので・・・

頑張って戦闘描写を書きました

誤字・脱字があれば教えて下さい

究極の呪い……

side 劉

俺達は今、“聖剣オメガブレード”を持った男と激しい戦いを繰り広げている。

俺は“天鎖斬月”・遊星は“死ぬ気のグローブ”で、男と戦っている。

だが俺達は近距離からではなく、遠距離から攻撃を放っている。これにはちゃんとした理由が存在する。

奴の戦い方を見ていれば、初心者も同然な戦い方をしている。

だが“オメガブレード”の能力が余りにも厄介過ぎるから、俺達は遠距離で攻撃を放っている。

“オメガブレード”の能力は、斬った物を初期化する能力を持っている。

簡単に言うと、オメガブレードで水を斬ると原子に初期化する。

つまり、もし俺達の体の一部に少しでも、ほんの少しでもオメガブレードで斬られると、俺達は初期化されこの世から消えてしまう。

だから、俺達はそれを防ぐ為に遠距離から攻撃を放っている。

遊星「遠距離から攻撃を放つてもよ、余りダメージを与えてないよな!!」

隣で攻撃を放っている遊星が、男を睨みながら俺に言ってきた。

確かに、男には俺達の攻撃は殆ど喰らっていない。

大半は、オメガブレードで防がれ消えちまう。

しかし、だからと言って近付いて攻撃するのは自殺行為だ。

だが、このままではコッチの体力が切れて負けてしまう……

一か八か……“常識を操る程度の能力”を使って、勝負に出るかねえな

劉「遊星、“常識を操る程度の能力”で“オメガブレードの攻撃を遮断する常識”を創り出し、俺があの方に攻撃する。だからお前は俺が攻撃した後、あの男を攻撃してくれ。」

俺が遊星にそう言つと、遊星は驚いた顔で俺を見てきた

遊星「バカ野郎！お前が幾ら“常識を操る程度の能力”でそんな常識を創つても、オメガブレードで常識も初期化されるかもしれないんだぞ！！」

確かに、遊星が言つた事も可能性は0では無いとは言えない。
アイツが持っているオメガブレードは、俺達が知らない能力が在るのかもしれない。

もし、俺が創り出した常識が破られたら、俺は死ぬかもしれない・
・
だけだよ・・・

劉「このまま戦っていたつて、俺達の体力が尽きて負けるだけだ！
！それなら、俺は残された可能性を信じたい！！だから遊星、俺の作戦に協力してくれ！！」

俺が真剣な目で遊星を見ながら言つと、遊星は少し黙り込んで渋々頷いてくれた。

アイツが攻撃してこない今がチャンスだ！！

劉「“オメガブレードの攻撃を全て遮断する常識”！！」

俺は常識を創り出し、天鎖斬月を構えて瞬歩で男に近付いた。
そして俺は男の後ろに回り込み、天鎖斬月で斬り掛かった。

「世界の呪い、発動。」

ザシュッ！！！！

ドスッ！！！！

俺は男を天鎖斬月で斬り、男は何かを呟いた後オメガブレードで俺を刺した

劉「！？・・・グフッ！！」

俺は口から血を吐き出した。

「ガハッ！！こ、このガキがア！！！！」

男も口から血を吐き出して、俺に今迄以上の殺気を放ちながら俺を思いつき蹴ってきた。

その所為で、オメガブレードが俺の体から抜けたが、俺は地面に叩きつけられた。

劉「グフッ！！」

俺は更に血を吐いた。

視界が霞んできたし、体に力が入らねえし、オメガブレードで刺された場所は物凄く痛いし・・・

は、速く傷を防いで、あの男を倒さねえと・・・

劉「俺が触れた場所はどんな怪我でも完治する常識」

ビキッ！！

劉「！？う、ウワアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

俺が常識を創った瞬間、体に今迄感じた事の無い痛みが俺を襲った。頭は割れそうな痛み・手足が千切れそうな痛み・体中に剣の様な物で刺されている様な痛み・骨を粉々にされている様な痛み・・・俺は最後に上を見た。

そこには、俺と同じでオメガブレードが刺さっている遊星、死ぬ気零地点突破・初代エディションで凍結した男の姿があった。
ファースト

無事に・・・勝ったのか？

俺はそう思いながら意識を失った。

side 遊星

な！？

遊星「劉ウウウウ！！！！」

俺は前で起こった光景を信じられず、劉の名前を叫んだ。

何故なら、劉は常識を操って“オメガブレードの攻撃を全て遮断する常識”を創り出したのに、劉はオメガブレードで腹を突き刺され

ていたからだ。

何でだよ！？

劉は常識を操ったじゃねえか！？

なのに、何で劉は攻撃を喰らってんだよ！？

すると男は、劉を思いつきり蹴って劉を地面に叩きつけた。

ブチッ！！

俺の中で、何かが切れる音がした。

遊星「絶対に殺してやる！！！」

俺は男に近付いて、零距离X BUNERを放とうとした。
その時

劉「！？う、ウワアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

劉が人間が出せる筈が無い大声で悲鳴をあげた。

俺は視線を男から劉に移すと、劉は尋常じゃない苦しみ方をしていた。

俺は劉の所へ行き、劉の怪我を治せる物を創造しようとした。

ドスッ！！！！

すると男は、俺の腹にオメガブレードを刺していた。

「究極の呪い、貴様等は終わりだ。」

男が俺と劉を交互に見て何かを呟いていたが、俺には関係ない。
俺は死ぬ気のグローブを男の顔の前に構えた。
そして

遊星「死ぬ気零地点突破・初代エディション……」
ファースト

ガキイイインッ!!!!!!

男は、俺の“死ぬ気零地点突破・初代エディション”
ファースト
を喰らい凍結した。

俺はそれを確認すると、オメガブレードを引っ込抜いた。

遊星「ハア……ハア……無謀に……突っ込んじゃったな……」

俺がそう小さく呟くと、額の死ぬ気の炎は消え・死ぬ気のグローブも毛糸の手袋に戻った。

そして俺は、そのまま地面に落ちた。

地面に落ちた衝撃の所為で、意識が無くなりそうになった。

その時、俺の前に一人の老人が突然現れた。

俺に対して何かを言ってるみたいだが、全く何も聞こえない。

そして俺は、老人を見て意識を失った。

究極の呪い……（後書き）

次回は新しい味方が登場します

次回もお楽しみに！！

説明と真実と仲間（前書き）

文化祭の準備、マジで疲れました・・・

荷物運びや必要な物を買に行ったりして（言わばパシリ）、凄く疲れました・・・

しかも、夏休みの宿題が未だに終わっていない・・・

月曜から学校なのに・・・

誤字・脱字があれば教えてください

説明と真実と仲間

side 劉

・

・

・

・

劉「ウウ・・・こ、此処は・・・？」

俺は重い目蓋を開けて、今居る場所を確認した。

此処は・・・何処かの洞窟・・・なのか？

あれ、何で俺が此処に居るんだ？

「あつ、漸く目を覚ましました！大丈夫ですか、佐藤 劉？」

俺が此処に居る理由を思い出そうとしてみると、俺の隣に居た一人の女性が俺に話し掛けてきた。

・・・誰だこの女性、女性は俺の事を知ってるみたいだが俺はこの女性を知らないぞ？

劉「あ、貴方は？」

ズキッ！！

劉「！？ウ、ウウウ、か、体が・・・！」

俺が起き上がろうと体に力を入れた瞬間、体中に激痛が走った。その所為で俺は、力を入れる事が出来ずにまた寝込んだ。な、何で激痛が・・・？

「ダメですよ、まだ貴方の体は完全に癒えてないんですから。今は大人しく寝てないと。」

女性は俺にそう言って、毛布を俺に被せてくれた。

ほ、本当に、この女性は誰なんだよ？

俺は少しずつ治まっていく激痛に耐えながら女性を見ると、女性性は俺の視線に気付いて俺に頬笑んでくれた。

「おっ、漸く目が覚めた様じゃな、佐藤 劉よ。」

すると一人の老人が、笑いながら俺に話し掛けてきた。

・・・この老人も俺の事を知っているみたいだが、俺はこの老人の事を知らないぞ。

遊星「劉、目を覚ましたのか！？」

俺が老人の事を考えていると、手や頭に包帯を巻いている遊星が俺の横に来て聞いてきた。

遊星の傷・・・

！？

劉「遊星、あの男はどうなった！？ウ、ウウウ・・・」

俺は素早く体を起こして遊星に聞くと、また俺の体に激痛が走った。クツ、な、何で体が痛むんだよ・・・！？

遊星「りゅ、劉、お前の傷は俺より酷いんだから、今はしっかりと休んどけって！」

遊星は俺の背中を擦りながら、俺にそう言ってきた。

お、俺の傷は遊星以上の怪我をしたのか・・・

俺があの男に受けた傷と言えば、“オメガブレード”で刺された脇腹位しか無いと思うんだが・・・

「貴方が受けた傷は、オメガブレードで刺された傷だけでは無いんですよ。」

すると女性が、俺と遊星を見て悲しい顔をしながらそう言ってきた。
・・・この女性と言い、あの老人と言い、襲ってきた男と言い、一体何がどうなってるんだ？

.....

.....

.....

.....

俺はあの後、何とか岩に背中を預けて三人と輪の形を作る様にして座っている。

理由は、俺が女性と老人に幾つかの質問をするから、輪の形になって座っている。

劉「まず最初の質問だ、貴方達は一体誰なんだ？」

「私の名前はアテネ、四番目の世界の意志です。」

「ワシの名前はオーディン、六番目の世界の意志じゃ。」

女性と老人・アテネとオーディンは俺に聞かれたので、俺達に自己紹介をしてきた。

アテネにオーディン、神話に出てくる神達の名前かよ・・・

しかし、“世界の意志”って一体何だよ？

劉「二つ目の質問。世界の意志とは一体何だ？」

アテネ「世界の意志とは、その名の通り世界の意志の事です。」

オーディン「この世に存在する生物に意志が在る様に、世界にもちやんとした意志が存在する。その意志が具現化した物がワシ等じゃ。」

世界の意志の存在＝世界の意志が具現化した存在・・・か。

じゃあこの二人は、この“魔法少女リリカルなのは”の世界の意志が具現化した存在、と言う事になるのか・・・

劉「三つ目の質問。その世界の意志達が、俺達に一体何の用なんだ？」

アテネ「・・・私達は、私達と同じ世界の意志から貴方達を護る為に来ました。」

オーデイン「世界の意志はワシ等だけではなく、お前達が今日戦った男も世界の意志の一人じゃ。ワシ等以外は、お前達転生者を殺して、お前達が行った原作ブレイクを修正するつもりなんじゃ。」

この二人は俺達を護る為に俺達に接触してきて、残りの世界の意志達は俺達が行った原作ブレイクを修正する為に俺達を殺そうとしている。

・・・色々と厄介な事が、俺達の知らない事が起こっているんだな。

劉「四つ目の質問。俺がお前の仲間と戦っていて“常識を操る程度の能力”を使おうとしたら、体中に今迄感じた事の無い痛みを感じたんだ。何でこうなったか解るか？」

アテネ「それは私の仲間であるアポロンが“究極の呪い”を使つて、貴方の“常識を操る程度の能力”に呪いを掛けたんだと思います。」

オーデイン「“究極の呪い”を掛けられた能力をそのまま使えば体中に激痛を与える、そして最終的には呪いを掛けられた人間は死ぬんじゃ。」

・・・なる程、オメガブレードを刺された時に“究極の呪い”を掛けられたんだな。

そして、掛けられた後に“常識を操る程度の能力”を使つたから、体中に激痛が走ったんだな・・・

・・・って事は、遊星も“創造する程度の能力”に“究極の呪い”を掛けられたのか？

遊星「嗚呼、俺もあの戦いの時にオメガブレードで刺されたんだ。だから、俺も“創造する程度の能力”に“究極の呪い”を掛けられたんだ。」

俺がそう考え込んでいたら、遊星が俺の思っていた事を察したのか俺を見て言ってくれた。

劉「五つ目の質問。俺達は二度と、“常識を操る程度能力”や“創造する程度能力”は使えないのか？」

アテネ「いいえ、私達が“究極の呪い”を少しでも和らいだので、二度と使えない訳ではありませんよ。」

オーデイン「しかし、ワシ等が世界の意志の力で常にお前達に“究極の呪い”を和らいでおらんと、お前達は“常識を操る程度能力”や“創造する程度能力”を使えなくなるんじゃ。ワシ等が“究極の呪い”を和らいでいても、“常識を操る程度能力”や“創造する程度能力”は100%使えん。精々30%〜40%じゃな、最高に使えたとしても。」

つまり今は、二人が世界の意志の力を使って“究極の呪い”を和らいでくれているから、“常識を操る程度能力”や“創造する程度能力”は、少しだけだが使える訳なんだな・・・それじゃあ・・・

劉「最後の質問。貴方達二人は俺達の味方なのか、敵なのか、教えてほしい。」

アテネ「貴方達はこの世界のイレギュラーな存在だとしても、今はこの世界に存在する一人の人間です。私は、貴方達の味方です！」

オーデイン「ワシはまだ完全にお前達の味方ではない、言わば中立的な立場にある。じゃが、お前達と敵対するつもりは無いから安心

するんじゃ。」

アテネは100%俺達の味方で、オーディンは50%俺達の味方なのか・・・

劉「そうか、ありがとうな、質問に答えてくれて。それから、これからよろしく。」

遊星「これからもよろしくな！」

俺と遊星は、アテネとオーディンを見ながらそう言った。

・・・さて、これ先、俺達は世界の意志と戦う事になるのか。長い戦いになりそうだな・・・

説明と真実と仲間（後書き）

次回は、劉がはやてに秘密を話す話（を予定しています）

次回もお楽しみに！

はやてに秘密を……（前書き）

今回の話で、はやてにかなりフラグが建った様な気がします

しかし、アテネが空気だ……

誤字・脱字があれば教えてください

はやてに秘密を……

side 劉

アテネとオーディンの話を聞いて三日が経った。

この三日で俺と遊星の怪我は大分癒えて、戦う事はまだ出来ないが普通の生活が出来る迄回復した。

なので、俺ははやての家・遊星はスカリエッティのアジトに戻る事にした。

アテネは俺に付いて来てくれて、オーディンは遊星に付いて行っ
た。

そして俺とアテネは、アテネの力を使って無事に地球に帰って来
れた。

……地球には無事に帰って来れた、だが……

はやて「劉君、今日迄の三日間……一体何をしとったんや？しかも、
この女性は一切誰なんや？」

はやてが、正座している俺とアテネを目は笑ってない笑顔で聞い
てきた。

……俺とアテネは、地球に帰ってきて直ぐにはやての家に向かっ
た。

そして、家に着いたのでインターホンを押して、はやてに鍵を開
けてもらった。

だが家に入った途端、はやてに恐ろしい笑顔で「此处で正座や。」
と言われたので、俺達は直ぐに正座をした訳だ。

はやて「……なんでや……なんでうちにはなにもおしえてくれへん
の？」

劉「は、はやて!？」

俺とアテネが黙っていると、はやてが泣きだしてしまった。

俺は直ぐに立ち上がって、はやてに近付いた。

はやて「うちは……うちは……りゅうくんのことか……しんぱいやったんや……。……なのに、なんでりゅうくんはうちになにもはなしてくれへんの……?」

はやては、自分の服の袖で涙を拭きながら俺に聞いてきた。

……はやて、そんなに俺の事を心配してくれてたのか……

俺は一度はやてから視線をアテネに移し、アテネの顔を真剣に見た。

するとアテネは、俺の考えている事を分かってくれたらしく、俺に頬笑んで頷いてくれた。

……ありがとな、アテネ。

俺は心の中でアテネにお礼を言って、はやてに視線を戻してはやての両肩に手を置いた。

はやて「えっぐ……りゅ、りゅくん?」

はやてが、涙を流しながらも俺の顔を見てきた。

俺ははやてに頬笑みながら、近くに置いておいたハンカチではやての涙を拭いた。

劉「ごめんな、はやてに心配を掛けて……。今から、三日間の事を含めた俺の秘密を話すよ。俺が言う事は全部真実、だから、黙って俺の話を聞いてくれよ。」

俺がはやての涙を拭きながら言うと、はやては無言で俺の言葉に

頷いてくれた。

さて、この三日間の事に関係する俺の秘密を話さないとな……

劉「はやて、俺は……」

(説明中)

……これが俺の秘密と、今日迄の三日間の出来事だ。」

俺は、俺の秘密と今日迄の三日間の出来事を、はやてに嘘・偽りなく全て話した。

一番最初に、はやてに言った事は嘘だと言う事を……

俺は別の世界の人間で、その世界で一度死んだ存在だと言う事を

……

そして神様であるアフロディに力を貰い、この世界に転生した転生者だと言つ事を……

そして二日前、この世界の意志である男に殺され掛けたと言つ事を……

アテネの存在と此処に居る理由を……

俺は全てはやてに話した。

はやて「……そうやったんや。」

はやては小さくそう言つて、顔を下に向けて何かを考えだした。

……はやて、俺に対して悩んでくれてるんだろう。

だけど、はやては素直になつて俺に言つてほしい。

はやてが悪いんじゃないんだ、はやてには何の罪も無いんだ……

はやて「……ありがとうな、劉君。ウチにそんな辛い話を話してくれて。」

俺が心の中でそう思っていると、はやては顔を上げて俺にお礼を言つてきた。

……何でお礼を言つたんだ？

俺ははやてに嘘を吐いたし、はやてと同じ人間でもない。

俺は化け物並、否、化け物の力を持った人間……否、人間じゃない何か。

こんな俺に、何でお礼を言つたんだ？

はやて「確かに劉君に嘘を吐かれつつたって知った時は、凄くショックやった。……やけど、劉君が嘘を吐いたのには辛くて人には言

にくい過去が在ったから吐いたんやろ？そやけど、ウチを信頼してくれたからその事を話してくれたんやろ？そやから、ありがとう！」

はやては、俺の右手を自分の両手で優しく包んで俺に言ってくれた。

だ、だけだよ！！

劉「は、はやては俺の事を何とも思わないのか！？はつきり言つて、俺は人間じゃない！化け物だ！！そんな奴が居て、はやてはそんな俺を拒絶したり、避けたり、恐怖したりしないのか！？」

俺は大きな声を出して、心の中では怯えながらはやてに聞いた。
確かにはやて、近い将来に魔法の存在を知る事になる。

だけど、それ迄は普通の女の子だ！

だから、俺に対して何かしらの感情を抱いているに違いない！

俺が心の中で自己解釈していると、はやてが俺を抱き締めてきた。

……な！？

劉「は、はやて！？」

はやて「劉君は化け物やない。ウチと同じ人間、少し力を持った人間や。それに、ウチは劉君を拒絶したり、避けたり、恐怖したりせえへん。」

はやては、俺を抱き締めながら俺にゆっくり言った。

劉「な、何でだよ、は、はやて？」

俺は途切れ途切れになりながらも、はやてに聞いた。

するとはやては、少し俺から離れて優しく頬笑んできた。

はやて「ウチと劉君は家族やろ？ウチは、家族にそんな態度は取らへん。」

！？

劉「うつ……あつ……」

俺は、はやての言葉を聞いた途端、目から涙が出てきた。
するとはやては、俺をもう一度抱き締めてきた。

はやて「あの時と同じやね、ウチが泣いた時は劉君がウチを抱き締めてくれて元気をくれた。今度は、ウチが劉君に元気をあげる番や。」

はやてはそう言って、俺の頭をゆっくり優しく撫でてくれた。

俺ははやてに撫でられながら、声を殺して泣き続けた。

はやてに秘密を……（後書き）

次回はシンデレのお嬢様と吸血鬼のお嬢様が出る話（を予定しています）

次回もお楽しみに！

誘拐犯をぶっ倒せ！（前書き）

急いで執筆したので、もしかしたら変な所があるかもしれません

御了承ください

誤字・脱字・変な所があれば教えてください

誘拐犯をぶっ倒せ！

side 劉

はやてに真実を話して、何事も無く三日が経った。

あの後、俺は泣き止んでアテネがはやてに自己紹介をした。

はやて自身、「家族が増えるんやったらOKや！」と言って、アテネの同居を許可してくれた。

ホント、はやては良い子だよ。

そしてその後に翠屋に行ったら、なのはが泣きながら俺に抱き付いてきた。

なのはも、俺の事を心配してくれていたらしい。

その後は、久しぶりに三人で太陽が沈む迄遊んだ。

それから三日が経って俺は今、昨日買ったばかりの漫画をソファーに座って読んでいる。

はやては晩ご飯の準備をする為にキッチンに居て、アテネはボランティア活動に参加しているので家に居ない。

アテネがボランティア活動に参加している理由は、本人曰く「人の役に立ちたいんです！」「らしい。

世界の意志の中で優しいアテネの、アテネらしい理由だ。

三日間の説明はこれ位だな。

俺はソファーに寝転がって、仰向けになって漫画を読み始めた。

はやて「あっ！？」

俺が態勢を変えて漫画を読んでいると、はやてが突然大きな声を出した。

俺は漫画を閉じて起き上がり、顔をはやてに向けた。

劉「どうしたんだ、はやて？」

はやて「う、うん、少し買い忘れをしてもうてな……。」

はやては困った顔をしながら、大きい声を出した理由を俺に教えてくれた。

うーん、困っているなら……

劉「だったら俺が買ってくるよ。俺も暇してたしな。」

俺は立ち上がって、はやてが居るキッチンに歩きながらはやてに言った。

はやて「……ごめんな、劉君。これが買い忘れた物やから。」

はやては俺に謝って、小さい紙に買い忘れた物をメモして、そのメモとお金を渡してきた。

劉「分かった、直ぐに買って来るよ。」

はやて「気を付けてな。」

俺ははやてからメモとお金を受け取り、はやてに見送られて家を出た。

.....

.....

.....

……
劉「ふう、買った買った。」

俺は、先程スーパーで買った物を見ながらそう言った。
ホント、この街は綺麗だよな。
俺は歩きながら、街を見てそう思った。

ブウウウウウウン！！！！！！

俺がそう思っていると、後ろから軽くスピード違反のスピードで走ってきた車がやって来た。

そしてその車は俺の前を歩いていた二人の女の子の横に立ち止まり、中から数人の男が出てきて二人の女の子を無理矢理車の中に乗せて、直ぐに走って行った。

………えっ？

お、俺の目の前で、普通にゆ、誘拐？

劉「………何で俺は呑気にしてるんだよ！！」

俺は直ぐに正気に戻り、二人の女の子を誘拐した車を走って追い掛けた。

………

………

………

……

俺は、遊星から貰った携帯の機能を使い、買物袋を携帯に納入させて、誘拐犯達が逃げて来た古い倉庫にやって来た。

……ホント、この携帯は便利だな。

俺は物音を立てずに倉庫の扉に近付き、ゆっくりと倉庫の扉を開けた。

すると中には、気持ち悪い笑みをしながら二人の女の子達に近付いている数人の男と、泣きながら怯えている二人の女の子の姿が在った。

劉「ちよつと待ったアアア!!!!!!」

俺は倉庫の扉を勢い良く開けて、大声を出して男達に言った。
その所為で、中に居た皆が俺を見てきた。

「だ、誰だ、クソガキ!!!!!!」

一人の男が、俺を見ながら大声を出して聞いてきた。

俺の名前……そうだな……

劉「この街に住む少し変わった男だ!!」

俺はそう言つて、瞬歩で俺に叫んできた男の後ろに回り込み、手刀で男の首を殴つて男を気絶させ、二人の女の子の前に立った。

『な!!!!!!?』

俺が男を気絶させた事に漸く気付いた男達は、声を出して俺を見

ながら驚いた。

だが俺はそれに気にする事無く、泣いている二人の女の子に視線を合わせた。

劉「安心してくれ、俺が絶対に助けてやるからよ。」

俺は二人に笑いながらそう言って、立ち上がって真剣な顔をして男達を殺気を放った。

劉「何でこんな事をしたのかは知らないが、アンタ等がした事は犯罪だ。今から警察に自主するなら許してやるよ。」

俺は男達に最後のチャンスを与えたが、男達は刃物や鉄パイプを取り出して、俺に向かって走ってきた。

劉「……最後のチャンスを無駄にしたな。……後悔するなよ。」

俺は男達にそう言って、体全身に三割程度の雷のチャクラを集中させた。

チツチツチツチツ（ry

体全身に集中させられた雷のチャクラは、鳥の鳴き声の様な音でずっと鳴らした。

そして男達と俺の距離が僅かになった時、俺は雷のチャクラを一気に放出させた。

劉「千鳥流し！！！！」

『グワアアアアアア………』

男達は悲鳴を上げて、ゆっくり膝を曲げて倒れた。

俺は“千鳥流し”を止めて、倒れた男達の頸動脈に手を当てて生きていくかどうかを確かめた。

ドクン……ドクン……ドクン

全員の心臓は無事に動いていて、俺は安心して二人の女の子に近付いた。

劉「俺が此処でした事は内緒にしてくるよな。」

俺は二人を縛っていた縄を外しながら、二人にそう言った。

「……………」

二人は、俺の顔を涙を流しながら見てきた。

怖い思いをしたから、泣くのも無理ないよな……

俺はポケットからハンカチを取出し、二人の涙を吹いた。

劉「怖かったのによく頑張ったな。でも、泣きたい時に思いつき泣かないと辛いだけだぞ。」

俺は二人にそう言うと、二人は俺に抱き付いてきた。

「う、うわあああああああん!!!!!!!!!!」

二人は大声を出して俺の胸で泣き始めたので、俺は二人の頭をゆ

つくりと撫で続けた。

誘拐犯をぶっ倒せ！（後書き）

次回は金髪のツンデレお嬢様との話（を予定しています）

次回もお楽しみに！！

金髪のお嬢様の家へ（前書き）

な、何とか無事に執筆出来た……

テスト後なので凄く疲れました、マジで……

来週の土曜日迄テストが在るので、もしかしたら来週は更新出来ないかもしれません

誤字・脱字が在れば教えてください

金髪のお嬢様の家へ

Side 劉

誘拐犯を殺さない程度に加減して倒した日から二日が経った。
今日、俺は少しお洒落をしてある場所に向かっている。
お洒落と言っても、普段着と余り変わりは無いがな……
そう思っていたら、何時の間にか目的地に着いていた。

劉「……本当に大きいな、此処の家は……」

俺は、目の前に在る大きな屋敷を見上げながらそう呟いた。
この家は、海鳴市に住んでいるお金持ちの家の一つだ。
はやての家（俺の家）も大きいが、この家はそれ以上に大きい。

劉「さて、何時迄も関心しないで、さっさと家に入れて貰おう。」

俺は独り言を言つて、背伸びをしてインターホンを押した。
……小さい体って便利かと思っただけ、変な所で不便になるよな。
まあ気にしないけどさ……

「はい、ドチラ様でしょうか？」

俺がそう思っていたら、インターホンから男の人の声が聞こえてきた。

……この家の執事か、メイドさんだろう。

劉「家に呼ばれた佐藤 劉と言う者です。」

俺は背伸びをして、インターホンに聞こえる様にそう言った。

……面倒臭いな、体が小さいと……

まあその内、体が勝手に慣れてくれるだろ。
人間の慣れって、本当に怖いよな……

『佐藤 劉様ですね、お待ちしておりました。』

男の人が俺にそう言つと、俺の前に在る扉が開いた。

……様付けで呼ばれるのは慣れてないから、凄く変な気分だ。
俺はそう思いながら、扉の中に入って行つた。

………

………

………

………

劉「犬……犬……犬……何処を見ても……犬……どうやって見ても
……犬……此処は犬の飼育園か？」

俺の屋敷に入つての一言が、“犬”と言つ言葉が沢山出てきた。
だが、“犬”と言つ言葉が沢山出てきても俺は悪く無いと思う。
何故なら、この屋敷の至る場所に犬が沢山居るからだ。

「佐藤 劉様ですね？ワザワザ遠い所から来て頂いてありがとうございます
ざいます。」

すると前から、執事服を着た少し老けている男性がやって来て、
俺に頭を下げてそう言つてきた。

……この人、犬を器用に避けてやって来たよな……
もう慣れてるんだ、犬の事を……

劉「別に遠い場所からやって来た訳ではありませんよ。それに、招待されたのは俺なんですから。」

俺は苦笑いしながら、俺に頭を下げている男性にそう言った。
招待された立場なのに、来ただけで頭を下げられるのは何か変な気分だ。

俺がそう思っていると、執事服を着た男性は頭を上げてくれた。

「フッフ、お嬢様から聞いた通り、貴方はお優しい御方だ。」

執事服を着た男性は、俺に頬笑みながらそう言ってくれた。

……ヘエ、アイツ、俺の事をそんな風に見てくれてたんだ。

「申し遅れました、私はお嬢様専属執事の鮫島と言います。」

劉「俺の事は知ってると思いますが、俺は佐藤 劉と言います。今日はお世話になります。」

鮫島「はい、よろしく願います。それでは、お嬢様が部屋でお待ちしておりますので、直ぐに部屋にご案内します。」

劉「はい。願います。」

さて、何をさせられるのかね……？
俺はそう思いながら、犬を踏まない様に鮫島さんの後を付いて行った。

金髪のお嬢様の家へ（後書き）

さて、次回はほのぼのした話（を予定しています）

……何時になったら原作に入れるんだ？

次回もお楽しみに

ARISA・BANINGUSU（前書き）

今日、祝日なのに学校に行ってテストを受けてきました。

現代国語は大丈夫ですが、家庭科が凄く心配です……

ヤバい、マジで心配になってきた……

誤字・脱字が在れば教えてください。

ARISA・BANINGUSU

side 劉

俺は鮫島さんに案内された部屋に入ると、そこにはかなりご立腹の顔をした金髪の少女が居た。

「劉！アンタ、私を待たせるってどう言う事！？」

金髪の少女は怒りながら俺にそう言ってきた。

……俺って遅刻したのか？

俺は部屋に在る時計を確認すると、時刻は未だ十時前だった。

劉「何を言ってるんだ？元々、此処には十時に来いってお前が言っただぞ、アリサ？」

俺は不機嫌な金髪の少女・アリサを見ながらそう言った。

コイツの名前はアリサ・バニングス。

何故俺がアリサの家に居るのかと言うと、簡単に言うとあの事件（誘拐事件）でアリサを助けたのでそのお礼的な感じで呼ばれたのだ。

もう一人の方にも呼ばれていて、ソッチには明日お邪魔させて貰う。

まあ説明はこれ位にして、何でアリサは怒っているのが俺には理解出来ない。

俺は十時に家に来る様アリサに言われたのに、十時前に来たら遅いってどうなのよ？

鮫島「お嬢様は劉様と速く会いたかったのですよ。」

アリサ「さ、鮫島！？／／／」

俺が考えていると、俺の隣に居た鮫島さんがアリサが怒っている理由を教えてくれた。

アリサは顔を赤くして、鮫島を可愛く睨み付けていた。

そして俺と目が合うと、顔を下に向けて目を逸らされた。

劉「それは悪かったなアリサ、待っててくれたのにそんな事に気付かず時間通りに来ちまって……」

アリサ「べ、別に良いわよ……。ちゃ、ちゃんと来てくれたし……／／／」

俺が申し訳ない気持ちで謝ると、アリサは顔を上げて俺を許してくれた。

しかしアリサ、お前はそんなに……

劉「そんなに俺と遊びたかったなんてな。」

俺が笑いながらそう言うと、急に部屋の空気が冷たくなった。

……えっ、俺って間違った事を言った？

アリサを見ると俺を見て深い溜め息を吐いてるし、鮫島さんを見ると俺を同情などの感情が籠もった目で見てくるし……

俺は悪い事を言ったのか？

そうじゃないと、二人がこんな態度を取る訳無いし……

劉「えっ……と、理由は分からないけどごめん。」

アリサ「……良いわ、別に。何となく予想はしてたしね……」

俺が謝るとアリサは許してくれたが、何を予想してたんだ？

……さっぱり分からん。

鮫島「それではお嬢様、劉様、何か在れば呼んでください。」

劉「あつ、ありがとうございました。」

鮫島さんは俺とアリサにそう言って部屋を出て行こうとしたので俺は鮫島さんにお礼を言っと、鮫島さんは俺に頬笑んで頭を下げて部屋から出て行った。

……スゲー格好良いんだけど、鮫島さんって。
士郎さんとは違った格好良さが在るんだよな、鮫島さんは……
それに凄く執事が格好良く見えてきた……
今度鮫島さんに、執事の極意でも教えて貰おうかな？

アリサ「それじゃあ劉、今日は一杯遊ぶわよ！」

劉「お、おう！」

俺はアリサに少し遅れて返事をして、俺達は遊び始めた。

……

……

……

……

劉「はやて、俺の姿を見てどう思う？」

はやて「何や急に呼んだ……り……し……て………」

劉「今日帰りに、鮫島さんが俺にこの執事服をプレゼントしてくれ
たんだ。……似合ってるか？」

俺はその場で回転して、はやてに執事服を見せた。

今日の帰り、鮫島さんが余っていた執事服を俺にプレゼントしてく
れたんだ。

プレゼントを貰った時は、鮫島さんと堅い握手をしたぜ！

ただ条件として、アリサの執事を時々やって欲しいって言われた。
俺は迷う事無くOKを出し、執事服を貰った。

アリサが顔を赤くしていたが、俺には顔を赤くする要素が何処に
在ったのか分からなかったがな……

そして家に帰ってきて、執事服に着替えてはやてに感想を求めて
る訳だ。

はやて「（ボー）／／／／」

はやては顔を赤くして俺をボーっとしながら見ていた。

劉「えっ……と、はやて？」

はやて「！？」に、似合ってるで、劉君！凄く格好良い！／／／／」

はやては顔を赤くしながら感想を言ってくれた。

少し、執事の練習でもしておくか……

劉「ありがとうございます、はやてお嬢様。」

はやて「あ、アカン……／＼／＼」

俺は方膝を付いてはやてに頬笑みながらお礼を言つと、はやては顔を赤くして気絶した。

……

劉「は、はやてエエエ!!?」

俺はその後、はやてを急いで部屋に運んでベッドに寝かせた。

そしてボランティアから帰ってきたアテネに、一時間は軽く説教された。

はやては時々執事服を着てくれって言つし、アテネは二度と執事服を着るなって言つし……

どうしたら良い訳、俺は？

ARISA・BANINGUSU(後書き)

次回はおしとやかお嬢様の話(を予定しています)

次回もお楽しみに!!

紫髪のお嬢様の家へ（前書き）

今回から「」の前の名前を省きます。

頑張つてキャラを出していきますが、分からない部分が在るかもしれませんので御了承下さい。

誤字・脱字が在れば教えてください。

紫髪のお嬢様の家へ

side 劉

アリサの屋敷に招待され、アテネに説教された日の翌日・・・

「さて、今日は一体何をするのかね？」

俺は今日も、少しお洒落をしてある場所に向かっている。

白を基調とした半袖のＴシャツに黒のジーンズと言う普通の格好
なんだけどな……

まあそんな事を思いつつ歩いていたら、何時の間にか目的地に着
いていた。

「……此処の家も我が家やアリサの家に負けない位大きいな……」

俺は、我が家やアリサの家に負けない位の大きさである目の前の
屋敷を見上げながらそう呟いた。

今日も俺はある人物に招待されて此処にやって来た。

……アリサの家に行った時も思ったが、何かプレゼントを持って
きた方が良かったかも……

俺は昨日と今の事を少し後悔しながら、背伸びをしてインターホ
ンを押した。

……やっぱ小さい体って不便だな、今更だけど……

『はい、ドチラ様ですか？』

俺が小さい体に心の中で少し愚痴を思っていたら、インターホン
から女の人の声が聞こえてきた。

……声が女の人だったから、多分この家のメイドさんだろう。

っと、何時迄も黙ってちゃダメだな。

「今日、家に招待された佐藤 劉と言う者です。」

俺は背伸びをして、インターホンに聞こえる様に少し大きな声で
そう言った。

…… アリサの家では体が勝手に慣れてくれるって思ったけど、慣
れる迄に時間が掛かるぞ……

『佐藤 劉様ですね、お待ちしております。』

俺がそう思っていると、女の人が俺にそう言って俺の前に在る扉
を開けてくれた。

…… やっぱ様付けで呼ばれるのは、何か変な気分だ。

まあ、そんな事を思っけていてもしょうがないから、速く家に入る
う。

俺はそう思っけて屋敷の中に入っけて行っけた。

………

………

………

………

「猫……猫……猫……何処を見ても……猫……どうやって見ても……

……猫…… アリサの家が犬の飼育園なら、此処は猫の飼育園だな……」

俺は屋敷に入っけての一言がアリサ家では“犬”だったけど、此処で

は“猫”と言う言葉が沢山出てきた。

しかし、“猫”と言う言葉が沢山出てきてもしようがない。
何故なら、この屋敷の至る場所に猫が沢山居るからだ。

……アリサの家とほぼ同じ反応と同じ説明しかしてないな、俺……

「佐藤 劉様ですね？お迎えに行けなくて申し訳ありません。」

すると前から、メイド服を着た薄い紫色の髪をした女性がやって来て、俺に頭を下げて謝ってきた。

「否々、招待されたのは俺なんですから、謝らないで下さい。」

俺は苦笑いしながら俺に謝ってきたメイドさんにそう言った。

招待されたのは俺なのに、迎えに来られたら何か悪い気分になる。
こう言う所が日本人なのだろうか？

俺がそう思っていると、薄い紫の髪のメイドさんは頭を上げてくれた。

「……男の子が苦手なお嬢様が唯一話せるのも理解出来ます。」

薄い紫の髪のメイドさんは、俺に頬笑みながらアイツの事を教えてくれた。

……アイツ、男が苦手だったのか……

だけど、俺は男なのに招待されたよな？

……何で？

「申し遅れました、私は忍お嬢様のお世話係りのメイドのノエル・K・エーアリヒカイトと言います。」

俺が考え込んでいると、薄い紫の髪のメイドさん・ノエルさんが

頭を下げて自己紹介してくれた。

「まあ俺の事は知っているとありますが、俺は佐藤 劉と言います。今日はよろしくお願いします。」

俺がノエルさんに頭を下げてそう言うのと、ノエルさんは「コチラこそよろしくお願いしますね」と言ってくれた。

「おねーさまー!!」

ノエルさんが俺にそう言った時、奥からもう一人のメイドさんがコツチ向かって来た。

このメイドさん、何処かノエルさんと似てる様な？

「この子は私の妹の……」

「ファリン・K・エアリヒカイトです！」

するとノエルさんに似ているメイドさん・ファリンさんは俺に頭を下げて自己紹介してくれた。

「俺は佐藤 劉です。今日はよろしくお願いしますね。」

俺は頭を下げてファリンさんに自己紹介をすると、ファリンさんは元気な声で「よろしくお願いします！」と言ってくれた。

「ファリン、劉様をすずかお嬢様の所へ。」

「はい、おねーさまー！」

そしてファリンさんは歩き始めたので、俺はファリンさんの後を付いて行った。

途中、何も無い所でファリンさんが何度も転けそうになったので、その度に俺が体を張って助けた。

ファリンさんはなのはと同じ分類だろう、ドジと言う分類に……

紫髪のお嬢様の家へ（後書き）

次回はほのぼのした話（を予定しています）

次回もお楽しみに

TUKIMURA SUZUKA (前書き)

久しぶりに書いたから前の勘が中々取り戻せないです……

出来るだけ更新したいですが、バイトが在れば更新出来ないの
で其処の所はご了承下さい。

誤字・脱字が在れば教えて下さい。

TUKIMURA SUZUKA

side 劉

俺はファリンさんに案内されて、アイツが居るこの屋敷の大きな庭にやって来た。

庭に出ても、相変わらず猫は沢山其処等中に居るがな……

そして少し歩いていたら、椅子に座って猫を撫でているアイツの姿が見えた。

「其れじゃあ私は此処迄です！何か在ったら呼んで下さいね！」

「あつ、ありがとうございました、ファリンさん。」

するとファリンさんは俺に頭を下げてそう言ってきたので、俺も頭を下げてファリンさんにお礼を言った。

ファリンさんは俺に笑顔で「どういたしまして！」と言って、走って屋敷に向かった。

途中、何も無い場所で倒れて地面とキスしてたが……

「こんにちは、劉君。」

すると後ろで椅子に座って猫を撫でているこの屋敷のお嬢様が、俺に挨拶をしてきた。

「こんにちは、そして今日はありがとな、すずか。」

俺は後ろを振り返って椅子に座っている奴・月村 すずかに挨拶とお礼を言って、目の前に空いている椅子に座った。

俺が椅子に座ってすずかの顔を見ると、すずかはクスクスと笑っ

ていた。

「別に良いよ、助けてくれたお礼も兼ねて家に呼んだんだからね。」

「そうか？でもお礼を言わせてくれよ、ありがとな。」

俺はすずかにそう言われたが、それでも俺はすずかに頭を下げてお礼を言った。

するとすずかは苦笑いをして「どういたしまして。」と言ってくれたので、俺は頭を上げて笑った。

「しかしすずか、ノエルさんから聞いたんだが男が苦手らしいな？」

「えっ……うん、ちょっと苦手かな。」

「じゃあ何で俺は男なのに普通に話せるんだ？俺も男なんだが……」

俺はノエルさんから聞いた話をすずかに確認を取ると、すずかは苦笑いをしながら答えてくれたので俺は少し真剣な顔をして聞いた。俺はすずかが苦手な男なのに、すずかは全く無理をせず本当に何処にでも居そうな女の子だ。

そんな子が、男が苦手って言われても説得力に欠けるから俺は聞いたんだ。

「何でかな？……劉君は普通の男の子と違って気軽に話せるんだよね。」

「其れは俺がお前を助けたからか？」

「違うよ。……只、劉君には普通に話せるんだよね。」

すずかは苦笑いしながら俺の質問に素直に答えてくれた。

…… 何で俺は他の奴と違って普通に話せるんだ？

俺は今流行りの男の娘じゃない、顔は完全に男顔。

其れにこれと言ってすずかに何かをした訳でも無い。

…… 謎だね、世の中は不思議な事が一杯だね。

「…… ねえ、劉君？」

「ん？…… どうしたんだ、すずか？」

俺が一人で頭に在る疑問を適当に考えていると、真剣な顔をしたすずかが話し掛けてきた。

俺はすずかの顔を見て、ちゃんと椅子に座り直して真剣な顔をしてすずかを見た。

「…… 劉君って普通じゃないよね？」

「…… 何を言いたいのか全然分からないんだが……」

すずかの言葉に、俺は頭に？マークを浮かべて素直な感想をすずかに言った。

「ごめんね。…… でも劉君は、他の人と違うって怖くないの？ 変な目で見られたりとか、イジメられたりしないかとか……」

すずかはそう言って、顔を下に向けて黙り込んだ。

…… すずかは他の奴と違う所が在るみたいだな、そして他の奴に其の違う所を知られるのを恐れてるんだな。

「確かに怖い。」

「……えっ？」

俺は素直な答えをすずかに言うと、すずかは俺の答えに驚いて顔を上げた。

すずかの目には、涙が溜まっていた。

「俺は普通の奴と違って力が在る。俺にとって一番怖いのはイジメられる事や怖がられる事・死ぬ事じゃない。……今迄友達だと思っていた人に拒絶される事だ。」

「……………」

俺は真剣な顔をして嘘・偽りの無い本当の気持ちをすずかに言っている。すずかは俺の話を黙って聞いてくれている。

「今は俺の力を知ってる奴は、すずかを含めて数人の人達だけだ。だけど俺は、何時か自分の力の事を皆に言いつもりだ。」

「……………どうして？」

「俺は100%の絆で繋がりたいからだ。なのにこの力を秘密にしておいたら、100%の絆を結べないだろ？俺は相手を100%信じたいし、100%信じられたいからな。」

俺はそう言った後、すずかに笑いながら「格好付け過ぎたな」と言って椅子に凭れて背伸びをした。

「……………私にも、そんな絆を結べるかな？」

するとすずかは、真剣な顔をして俺の顔を見ながら俺に聞いてきた。

俺はちゃんと座って、すずかに頬笑んだ。

「嗚呼、何時かきつと堅い絆を結べるさ。もし世界中がすずかとの絆を拒否したとしても、俺は絶対にすずかとの絆を捨てたりなんかしないから。……安心してくれよ、すずか。」

「……………ありがとうね、劉君。」

俺は厨二病の様な言葉をすずかに言うと、すずかは凄く嬉しそうな顔で俺にお礼を言ってくれた。

俺はすずかの顔を見て、俺は安心してすずかの顔を見て……

「どういたしまして。」

笑いながらすずかにそう言った。

TUKIMURA SUZUKA (後書き)

次回は小学校に入学する話(を予定しています)

次回もお楽しみに！

小学校の入学式（前書き）

入学式って題名なのに、入学式の話じゃない……

バイトをマジで辞めたいッス。

……関係ありませんね、全く。

誤字・脱字・変な所が在れば教えて下さい。

小学校の入学式

side 劉

すずかの屋敷に遊びに行った日から少し歳月が経った。

あれから今日迄に在った事や起こった事を、出来るだけ短く簡単に説明するぜ。

先ず最初に、アテネが俺とはやての保護者代理になった。

俺はアフロディの力で戸籍はちゃんとこの世界に在るのだが、保護者が居ないと色々大変だからな。

まあ名前は特に変わっていないが、俺とはやての保護者代理になったんだ。

二つ目、アリサとすずかがなのはとはやてと友達になった。

まあ俺が裏で色々と頑張ったのだが、四人は仲の良い友達になった。

三つ目、士郎さんに時々修行してもらっている。

士郎さんは元ボディーガードで、最強の剣士だから学べる物が沢山在る。

だから師匠弟子関係になって、士郎さんに剣術を教えて貰っている。

まあ偶に、なのはのお兄さんの京也さんや美由紀さんと試合をしてるがな……

五つ目、アテネが仕事を始めた。

何処で働いているのかは教えて貰っていない、地球>ほしくの本棚で検索しても出てこない。

だけど、何処かで働いて家にお金を入れている。

只、給料がハンパない金額だったので最初見た時は一瞬気絶した。六つ目、今日から俺達は小学生だ。

俺達が通う学校は、私立聖祥大附属小学校と言われる学校だ。

この学校には入試が在ったのだが、俺達は其の入試に合格したの

で通えるんだ。

俺の学費はアテネが払ってくれると言ってくれたので、ソッチの方の問題は無い。

まあこれ位かな、説明しなきゃいけない事は。

それでだ、さっき説明した通り今日から俺達は学校なんだ。

だから俺は、学校の制服を着ているんだが……

「あっはははははは！……に、似合っているぞ、りゅ、劉……あっはははははははは！……！」

ソファーに座って俺の制服姿を見て爆笑している遊星が、涙目になって爆笑しながら俺にそう言ってきた。

遊星が此処に居る理由は、俺達の入学式を見に来たからだ。

遊星の事は既にはやてに言っているから問題が無いんだが、此処迄爆笑されたら幾ら俺でも我慢出来ない。

「遊星、本気でぶっ飛ばしてやるよ！表に出るや、ゴラア！」

「アア？お前がお坊ちゃん制服を着てるから悪いんだろうが……まあ戦ってやるよ。ドッチが強いのか白黒ハッキリさせようじゃねえか！」

俺が遊星を睨みながら遊星にそう言つと、遊星も俺を睨みながら俺にそう言ってきた。

良いぜえ、ドッチが上なのか分からせてやるよ！

パシンッ！！×2

俺達が外に出ようとした瞬間、ハリセンで頭を思いっきり叩かれた。

俺と遊星は余りの痛さに、頭を押さえて痛みを抑えようとした。俺達が後ろを見たら、ハリセンを持つているはやてが居た。

……ハリセンは何処から持ってきた、はやて？

「今から入学式なのに、何してんの二人とも？」

「聞いてくれよ、はやて。遊星が俺の制服姿を見て、爆笑して馬鹿にしてくるんだよ。」

俺がはやてに原因を教えると、はやてが俺の制服姿を凝視してきた。

……やっぱ、俺の制服姿って変なのか？

其れはシヨックだ、シヨック過ぎる。

変な制服姿で六年間過ごさないといけないって分かんると、更にシヨックが大きくなって立ち直れなくなりそう……

「うーん、別に変じゃないと思うけどな。変どころか凄く似合ってると思うで、ウチは。」

するとはやて、笑顔で俺の制服姿を見ながら遊星にそう言った。

「聞いたか、遊星！？似合ってるってはやてが言ってるぞ！お前の美的感覚が可笑しいから、俺の姿を見て笑ってるんだよ！」

俺ははやての言葉を聞いて、はやての隣に移動して勝ち誇った顔をして遊星にそう言った。

俺が遊星にそう言ったら、遊星は呆れた顔をして俺とはやてを見してきた。

意外に失礼な奴なんだな、お前って……

「……将来が面倒臭い事になるな。」

すると遊星は、明後日の方角に顔を向けながら俺を見てそう言ってきた。

……独り言ばかり言っていると、将来絶対に認知症になるぞ。

「皆ー、そろそろ学校に行くわよー！」

すると着物を着たアテネが、玄関から俺達にそう言ってきた。

「……まあ行くとするか。」

「……嗚呼。」

「そうやね。」

俺達は必要な荷物だけを持って、玄関に行つて靴を履いて聖祥大附属小学校行きのバスに乗つて小学校に行った。

さて、原作が始まる迄後三年……其れ迄は楽しい小学校ライフを楽しみますか。

俺はバスの窓から大空を見ながら、心の中で小学校を楽しむ事を決心した。

小学校の入学式（後書き）

次回から無印の話（を予定しています）

次回もお楽しみに！

始まったストーリー（前書き）

今回から無印です。

誤字・脱字・変な所があれば教えてください。

始まったストーリー

side 劉

聖祥大附属小学校に入学して何事も無く三年と言う歳月が経った。入学式から今日迄、特に大きな事件に巻き込まれたりする事は無かった。今は取り敢えず平和に過ごしています。

「劉君、速く食べなバスに乗り遅れるで。」

俺の前に座って朝ご飯を食べているはやてが、時計と俺を交互に見てそう言ってきた。

はやては車椅子で学校に毎日通う事が無理なので、アテネが休みな金曜日だけ学校に通っている。

だがアテネは今日は仕事で朝早くから会社に行ってるので、はやては今日は学校を休むのだ。

「嗚呼、急いで食べるよ。」

俺ははやてにそう言って、言った通り急いで朝ご飯を食べ始めた。こんな時でもちゃんとご飯は噛んで食べるぞ、噛んで食べた方が体に良いからな。

俺はそんな事を思いながら食べていると、何時の間にか完食していた。

俺は手を合わせて「御馳走様。」と言って、食器を持って台所に行って流し台に食器を置いた。

「洗い物はウチがやつとくから、劉君は今直ぐにバス停に向かい。じゃないと、冗談抜きで遅刻するで。」

「マジかよ……それじゃあ行ってくる！」

俺は時計を見て時間が余り無い事を確認して、準備しておいた荷物を持って玄関に向かって、靴を履いてリビングに居るはやてにそう言っただけ扉を開けた。

はやては俺にリビングから「行ったらっしょい！」って言うてくれたので、俺は少し元気になってバス停に向かって走り出した。

「よう、猫。」

「にゃー」

俺は家の前の塀の上に居た猫・管理局の……グレアムだったかな？グレアムの双子の使い魔の……ドツチか分からん。

まあ取り敢えず、グレアムの使い魔に挨拶をした。はやての家に住み始めて大分経つから、コイツ等は俺の事を殆ど警戒しなくなった。

まあ魔力0だし、仕方が無いって言ったら仕方が無いんだけどね

……
って、こんな事を話してる場合じゃねえ！

俺は全速力でバス停に向かった。

……

……

……

……

「つ、疲れた……」

俺はバスの椅子の背もたれに凭れて、荒れた呼吸を整える為に深呼吸を始めた。

「劉にしてはギリギリだったわね。」

「寝坊でもしたの、劉君？」

すると俺の隣に座っているアリサとアリサの隣に座っているすがが、俺の顔を不思議そうな顔をしながら聞いてきた。

「朝ご飯をゆっくり食べてたからギリギリだった……」

俺は二人にギリギリだった理由を言うと、アリサは呆れた顔・すずかは苦笑いして俺を見てきた。

「どれだけ朝ご飯を食べるのに時間が掛かってんのよ……」

アリサは溜め息を吐いて俺を呆れた顔で見ながら言ってきた。
別に何時もは時間は掛からないんだが、昨日はアテネとはやてと一緒にドラクエ？の協力プレイをして……

「違った、昨日ドラクエ？をして夜更かししたからだ。」

俺がギリギリだった本当の理由が分かってそう言うと、アリサは更に呆れた顔をして溜め息を吐いてきた。

む、其の顔はドラクエを馬鹿にしてるな。

ドラクエ？、通称ドラゴンクエスト？は凄く面白いんだぞ。

協力プレイが出来ると言うドラクエ革命が起こった最高のゲーム

だぞ。

「劉君、今度一緒に協力プレイしない？」

俺がドラクエを心の中で熱く語っていたら、さすがドラクエ？の協力プレイを誘ってきた。

俺は無言でずかと握手をして、何度もずかに頷いた。

すずかは読書が趣味だが、ドラクエ？の協力プレイは読書と同じ位好きだからな。

だが、なのはとアリサはドラクエ？を残念な事に持っていないんだ。

……買って貰えば良いのに。

俺がそう思っていると、バスがバス停に止まった。

そしてバスになのはが乗ってきた。

なのはは俺達に気付くと、百点満点の笑顔で俺達の所にやって来て俺の隣に座った。

「お早う、なのは。」

「お早う、なのはちゃん。」

「お早うさん、なのは。」

「うん。お早う、アリサちゃん、すずかちゃん、劉君。」

俺達はなのはの顔を見ながら朝の挨拶をすると、なのはは俺達の顔をちゃんと見ながら朝の挨拶をしてくれた。

挨拶をする事はとても大切な事だから、皆もしっかりと挨拶をしような。

……俺は一体誰に言ってるんだ？

……この歳で惚け始めたのか？

其れは流石に不味いだろ……

小三で惚け始めるって前代未聞だぞ……

帰ったらはやてに相談するか？

否、変に心配をさせちまうから無理だな。

アテネに相談するか？

否、何か恐ろしい事をされそうな気がする……

「劉、帰ってきたら高町流 O・H A・N A・S H I です。」

死亡フラグが立った様な気がしたが、氣の所為……だと信じたい。

じゃあ遊星に相談するか？

……絶対に却下、全力で拒否する。

遊星の事だ、俺の事を絶対に馬鹿にするな。

此処は師匠である土郎さんに相談するのが一番だな。

そうだ、そうしよう。

「劉君がブツブツと独り言を言ってる……」

「今更気にしちゃダメよ、なのは。劉はこうなったら放っておくのが一番だから。」

「あ、あはははは……」

俺達は楽しい？朝の会話をしながら聖祥大附属小学校に向かった。決めた、今日は翠屋に行って土郎さんに相談しよう。

始まったストーリー（後書き）

次回は魔法少女が誕生する話（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

将来の自分について（前書き）

予告していた話を変更しました、本当にすいません。

誤字・脱字があれば教えて下さい。

将来の自分について

side 劉

朝のバスでの楽しい？会話から少し時間が経ち、聖祥大附属小学校は今昼休みの真っ最中だ。

俺は何時もの様になのは達に昼食を誘われたので、はやてが作ってくれた昼食を持ってなのは達と一緒に屋上に来ている。

屋上で昼食を食べるって事は俺達の中ではもう決まっている。

俺ははやてが作ってくれた昼食を食べていると、突然なのはが俺・アリサ・すずかに「将来皆はどんな職業に就きたい？」って聞いてきた。

なのは、お前は社会の授業での先生の問いを未だ考えてたのか……今日の社会科の授業で働く親に付いての話が在って、「将来自分はどんな職業に就きたいですか？」って先生が俺達に聞いてきたんだ。

其の質問をなのはは未だに考えていたらしい。

「アリサちゃんにすずかちゃん、劉君はもう結構決まってるんですよ？」

「でも全然漠然とよ。パパとママのお仕事を一杯勉強して私もやれたら居いなくて……其れ位だし。」

「私もだよ。ぼんやりとだけど『出来たら良いな』って思ってるだけ。機械系とか工学系とか好きだから、そういう系のお仕事がしたいな……って。」

「俺は特にしたいって事は未だ見つかってないな。だけど、後悔しない様に生きて助けられる人を助けたいって気持ちは在るな。」

なのはの問いに、アリサ・すずか・俺の順番でなのはに答えた。アリサとすずかの子供らしくない発言は今は置いて、俺はこの頃のはと同じで将来何がしたいか決まっていらない。

原作知識を使って原作ブレイクをするつもりだが、原作ブレイクをしなかったら何をしたい？って聞かれたら答えられない。

でも、転生した時から決めていた決意を嘘・偽り無く俺はなのはに言った。

「そつかあ、三人とも凄いねえ。」

なのはは俺達を本当に凄いと思った顔をしながら見てそう言ってきた。

「でも……なのはは喫茶『翠屋』の二代目なんかじゃないの？」

「そうそう、将来の旦那と翠屋を継ぐんだろ？」

アリサと俺は昼食を食べながらなのはにそう言つと、なのはは俺達の言葉を聞いて俯いた。

「うーん……其れも将来のビジョンの一つでは在るんだけど……やりたい事は、他に何か在る様な気はするんだけど、未だ其れが何なのかハッキリしないんだ。……劉君、私は未だ結婚なんて考えてないよ！」

なのはは俯きながら自嘲気味にそう呟いて、最後に俺を見ながらツッコんできた。

ツッコむタイミングは遅かった、ツッコむ内容は小学三年にしては良かったぞ。

俺はなのはにGJとして卵焼きを食べた。

あつ、この卵焼きの味付けが俺好みの味付けだ。
帰ったらはやてにお礼を言おう。

「私、特技も取り柄も特に無いし……」

俺がはやてに帰ったらお礼を言おうと心の中で決めていたら、なのはシリアスな空気を出しながら小さい声でそう呟いた。
……ってなのは！

「自分を否定するとかフザケるなよ！」

俺は大声を出してなのはを叱ったので、なのはを怒ろうとしたアリサや叱られているなのはは驚いた顔をして俺の顔を見てきた。

「自分を否定したら何もかもが出来なくなる！俺達は未だ子供だ、将来沢山の可能性を秘めた子供だ！なのにそんな可能性を捨てて、自分を否定したらダメだろ！」

「そつだよ、なのはちゃんにしか出来ない事はきつと在るよ！」

俺は少し怒った顔をしながらなのはに思った事を言うと、ずずかは俺の言葉に続けてなのはにそう言った。

するとなのはの後ろに回り込んだアリサが、なのはの口を突然目一杯広げた。

「大体アンタ、理数の成績はこの私より良いじゃないの！其れで取り柄が無いとか、どの口が言ってるのかしらねえ！！」

「ら、らって私……！ふん系苦手らひ！運動らってれきらいひ！」

アリサがなのはの口を目一杯広げながら説教をすると、なのはは涙目になってアリサ、否、俺達にそう言ってきた。

……何を言ってるのかは全然分らないが、何を言いたいのかは何となく分かる。

「だったら俺達を頼れば良いだろ？人間、この世に完璧な奴なんて存在しないんだ。人間は何かしらの苦手分野が在る、森羅万象になだけど、其の苦手分野を助ける仲間だつて居るんだ。なのはが文系が苦手なら教えてやるし、運動が出来ないなら手取り足取り基礎から教えてやる。だからもう二度と自分を否定しない、約束してくれなのは。」

俺はなのはにそう言うと、アリサはなのはの口を広げるのを止めて俺の隣にやって来て、すずかと一緒に俺の言葉にうなずいた。そして俺はなのはに小指を出すと、なのははゆっくり俺の小指に自分の小指を絡めた。

するとアリサとすずかも小指を俺となのはの小指に器用に絡めた。

「……私、迷惑を掛けるかもしれないよ？其れでも良いの？」

「迷惑上等！」

「当たり前よ！」

「勿論だよ！」

なのはが少し怯えた顔で俺達に聞いてきたので、俺達は真剣な顔をしてなのはにそう言った。

するとなのはは嬉しそうな顔をして小指に力を入れた。

「「「「「ゆーびきりげんまん、うそついたらはりせんぼんのーます、
ゆびきつた!」「」」」」

俺達は歌を歌って約束し、指を離した。

そして昼食を再び食べ始めた。

なのははさつきと違って心の底から楽しんでいる顔をしていた。

将来の自分について（後書き）

次回こそ魔法少女になる話（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

誕生する魔法少女（前書き）

バイトを遂に辞めれたアアア！！

うん、気分はマジで最高だね！！

英語は基本使いますが、間違って書いているかもしれないので、もしミスってたら教えて下さい。

誤字・脱字・変な所が在ったら教えて下さい。

誕生する魔法少女

Side 劉

「はやて、風呂掃除は終わったぞ。」

「じゃあ次は晩ご飯を作るの手伝ってくれへん？」

「了解ッス！」

俺は風呂掃除を終えてキッチンに居るはやてに其の事を伝え、はやてが食材を冷蔵庫から出しながらそう言ってきたので俺は了承してエプロンを付けてキッチンに入った。

あれから時間は大分経って、時刻は午後六時三十分。

学校から帰る際、なのは達に「一緒に帰ろう。」と誘われたが士郎さんに聞かなくてはいけない事が在ったので其の誘いを断って、一人で翠屋へ行って士郎さんに相談した。

士郎さんは素晴らしいアドバイスをしてくれて、其のアドバイスが納得出来る物だったから俺はシュークリームを買って家に帰ってきた訳だ。

俺は士郎さんに「最近、惚け始めたんですけどどうしたら良いですか？」と質問したら、「全てを受け入れたら心が軽くなるよ。」と答えてくれたんだ。

……あれ？

考えてみたら質問の答えになってないよな、士郎さんの言葉って

……

クッ、すっかり騙されちゃったぜ！

流石は最強の剣士だな……関係無いか。

「どうしたんや劉君、さつきから小さい声で独り言を言っ……」

「ん？何でも無いから気にしないでくれ。」

はやてが心配そうな顔をしながら俺に聞いてきたので、俺は笑顔ではやてにそう言っで鼻歌を歌いながら食材を切り始めた。

はやては俺のそんな行動を見て笑っで、俺と一緒に食材を切り始めた。

うんうん、誰かと一緒に料理を作るっで気分が良いな。

今日はカレーだな、頑張っで美味しいカレーを作っでアテネを驚かせたるで！

……何故急に関西弁になっただん？

……

……

……

……

「……………未だか？」

俺はリビングでソファーに座り、目を瞑りながら“ある事”を待っでいた。

其の“ある事”とは、ジュエルシードの暴走する事だ。

今日から原作が始まる、つまりなのはが魔法少女（決して魔砲少女では無い）になる。

俺はなのはが魔法少女になる時から介入し、絶対に全員が笑顔でいられる様に無印を完結させてやる。

しかし、何時になったら暴走するんだ？

コッチは外で見張っているグレアムの使い魔に怪しまれない様に、ランニング用のパーカーとジャージを着てるって言うのにさ……

はやてとアテネには既にこの事を話しているので、堂々と家を出れるけど暴走してくれないとな。

……………そう言えば、

「ユーノの念話が聞こえるのって魔力が在る奴だけだったっけ？」

俺はふと原作の事を思い出して小さい声でそう呟くと、頭が急にフル回転して顔が青ざめていくのが分かった。

魔力が無い俺〃ユーノの念話が聞こえない+原作開始が分からない。

「完ッ全にミスった!!」

俺は近所迷惑になる事も忘れて大きな声でそう言っつて、急いで玄関に向かってランニングシューズを履いて原作の林に向かった。

グレアムの使い魔は俺の格好を見て特に気にする様子を示さなかったもので、この作戦は上手く行ったが作戦の中心が失敗したよ!!クソッ!!

……………

……………

……………

……………

俺は瞬歩を何度か使って直ぐに原作の林にやって来た。

此処に来る途中、建物や道路・木などが破壊されていたのを見て、俺は“口寄せの術・天鎖斬月”を使って天鎖斬月を口寄せして、“影分身の術”を使って破壊された物の応急修理をした。

俺は天鎖斬月を持って林の中を走り回っていると、急に拓けた場所に出た。

すると其処には、フェレット姿のユーノと会話するのに夢中になっているのはと、其のなのはとフェレット姿のユーノを殺そうとしているジュエルシードの暴走体が居た。

俺は瞬歩を使ってなのは達の前に移動して、ジュエルシードの暴走体の攻撃を天鎖斬月で受け止めた。

ガッキイイン！！

グッ、ち、力が思ってたより強い……

「えっ、りゅ、劉君？」

なのはが驚いて途切れ途切れになりながら、後ろで俺に話し掛けてきた。

なのはに話そうと思った時、更に力が加わって力負けしそうになった。

「せ、説明は後だ！コイツは力が強いから長くは保たない、其の間に魔法少女になれ！！月牙天衝ッ！！」

俺は声を荒げてなのはにそう言っ、ジュエルシードの暴走体 pensando 思いつき蹴り飛ばして直ぐに天鎖斬月の必殺技の“月牙天衝”を

放った。

俺に蹴り飛ばされた+“月牙天衝”を喰らったジュエルシードの暴走体は、多少の傷は出来ていたが余りダメージは受けていなかった。

チツ、幾ら何でも強過ぎじゃねエか？

これも世界の意志の力か？

其れとも俺と遊星が生み出したイレギュラーの所為か？

俺は其の事を考え込みながらジュエルシードの暴走体に近付き、天鎖斬月を肉眼では捉えきれない速さで振ってジュエルシードの暴走体にダメージを与えていった。

だが、俺が斬って付けた傷も直ぐに消えてなくなつて、ジュエルシードの暴走体はカウンターをしようとしてくる。

クッ、何年も修行したのに全然歯が立たねエじゃねエかよ……
だけだよ……

「俺に出来る事は精一杯やるんだアア！！」

俺はそう言つて“月牙天衝”を放つ為にジュエルシードの暴走体から距離を取つて、“月牙天衝”を放とうとした時……

「レイジングハート、セットアップ！！」

[Stand By Ready Setup]

後ろからなのはとユーノの声、そしてレイジングハートの声が聞こえてきた。

すると次の瞬間、桜色の光が俺の後ろで光り出した。

さて、魔法少女が誕生したんだ、精一杯アシストさせて貰うぜ。

俺は天鎖斬月を両手で持つて、ジュエルシードの暴走体に構えながらそう思った。

誕生する魔法少女（後書き）

次回はなのはsideの話、そしてジュエルシードを封印する話を予定しています。）

次回もお楽しみに！！

リリカルマジカル（前書き）

金曜はすいませんでした。

テスト一週間前だったので更新が出来ませんでした。

今週の木曜からテストなので更新が出来ない可能性があるのでご了承下さい。

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

リリカルマジカル

sideなのは

私は突然、誰かに助けを求められたので急いで声が聞こえた場所に向かったの。

そして声が聞こえた場所に着くと、其処は今日林の中で倒れていたフェレットさんを預けた動物病院の近くだったの。

でも動物病院はボロボロになっていて、道路や建物にも亀裂が入っていたの。

私は怖くなつて逃げようとした時、フェレットさんが今迄見た事も無い生き物に追い掛けられていたのを見て、私は逃げるのを止めてフェレットさんを助けに行きたの。

フェレットさんの所に行こうとした時、見た事も無い生き物の体当たりをギリギリ躲してコッチに来たの。

そしてフェレットさんは、私の顔を見て嬉しそうな顔をしたの。

「僕の声を聞いて来てくれたんだ。」

・

・

・

・

えっ？

「フェレットさんが喋った!？」

私は目の前に居るフェレットさんが喋った事に、大きな声を出して驚いたの。

だ、だって驚くでしょ!?

あ、あの動物のフェレットさんがしゃ、喋ったんだよ!!
もう頭が付いて行かないよー!!

すると見た事の無い生き物が私達に突っ込んできたので、私は考えるのを止めてフェレットさんと一緒に走り出したの。

「君には素質が在る!」

私とフェレットさんが木の陰に隠れたら突然、フェレットさんが私の顔を見てそう言ってきたの。

そ、素質って私に何の素質が在るの!?

「君には魔法を使う素質が在るんだ!」

「魔法!?!」

するとフェレットさんが私の顔を見ながら魔法を使う素質が在るって言ってきたの。

ま、魔法って漫画とかに出てくるあの魔法?

私が考えていると、見た事の無い生き物が上から降ってきたけど、私とフェレットさんはギリギリ避けた。

「僕は君とは違う世界から来ていて、捜し物が在るんだ!だけど、僕の力は弱いから君みたいな素質が在る人に手伝って欲しいんだ!自分勝手なお願いですけど、お礼は絶対にしますから!」

「そんな事より、どうすれば良いの!?!」

フェレットさんが私に頼んできたけど、お礼とかそんな事を言ってる場合じゃないと思うの！

ガッキイイイン！！

すると突然、私の前から大きな音が聞こえてきたの。

私は急いで横を見ると、長くて黒い刀で私達を守ってくれている劉君が居た。

……………えっ、

「えっ、りゅ、劉君？」

「せ、説明は後だ！コイツは力が強いから長くは保たない、其の間に魔法少女になれ！！月牙天衝ッ！！」

私が劉君に話し掛けると、劉君が私とフェレットさんにそう言っ
て刀を横に降って、刀から黒い風とキックを見た事の無い生き物に
放ったの。

そして劉君は飛ばした見た事の無い生き物に直ぐに行って、刀を
凄く速い速さで斬っていたの。

「さあ、急いで魔法を！彼を助けないと！」

「うん！」

「目を綴じて心を澄まして。」

フェレットさんは自分の首に掛かっている宝石を私に渡してそう行ってきたので、私はフェレットさん言われた通りにすると宝石が温かくなり始めました。

まるで宝石が生きているかのような鼓動を、ほんの少しだけ感じました。

「管理権限、新規使用者設定機能フルオープン。」

すると宝石の鼓動が次第に大きくなり始めました。

「僕の言った言葉を繰り返してね。いくよ？」

「うん……！」

速くしないと劉君が……絶対に劉君を助けてみせる！

「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

「契約のもと、其の力を解き放て」

「えと……、契約のもと、其の力を解き放て」

「風は空に、星は天に、」

「風は空に、星は天に、」

「不屈の心はこの胸に、」

「不屈の心はこの胸に、」

「この手に魔法を！」

「この手に魔法を！」

「レイジングハート。セットアップ！」

[Stand By Ready Setup]

私がフェレットさんの言葉を繰り返して言うと、桜色の光の柱が現れたの。

えっ、一体どうしたの！？

「何て魔力だ……。落ち着いてイメージして！君の魔法を制御する、魔法の杖の姿を！そして、君の身を守る、強い衣服の姿を！」

「そ、そんな、急に言われても……」

フェレットさんが私にそう言ってきたので、私は小学校の制服と宝石に合いそうな魔法の杖をイメージしたの。

すると私がイメージした服装に変わって、私がイメージした魔法の杖を持っていたの。

「成功だ！」

「ふえ、ふえええ！？」

side 劉

「ふえ、ふえええ！？」

後ろからなのはの驚いた声が聞こえてきたので、俺は“月牙天衝”をジュエルシード暴走体に放ってなのはの隣に移動した。

「なのは、あれは俺の力じゃ倒せねエ。だからなのはの力で封印してくれ。」

「で、でも劉君、封印の仕方って私知らないよ……」

「……其処のフェレット擬き、俺がもう一度時間を稼ぐから、其の間になのはに封印の仕方を教える！」

「は、はい！！」

俺はユーノにそう言って、天差斬月を構えてジュエルシード暴走体に天鎖斬月の“超速戦闘能力”を使ってジュエルシード暴走体に連続で斬撃を放った。

“月牙天衝”より与えるダメージは少ないが、時間稼ぎをするにはこの戦い方で十分だ。

俺はジュエルシード暴走体の攻撃を紙一重で避けながら攻撃をしていくと、なのはの方から大きな力を肌で感じた。

俺は後ろを見るとなのはがレイジングハートをコッチに構えていた。

「劉君！」

「！？わ、分かった！」

俺はなのはに名前を呼ばれたので“瞬歩”でなのはの隣に一瞬で移動し、なのはは俺が隣に来た事を確認するとジュエルシード暴走体を睨み付けた。

「封印すべきは、忌まわしき器！ジュエルシード！」

「ジュエルシード、封印！」

〔Sealing Mode・Set up・Stand by Ready〕

「リリカルマジカル、ジュエルシード、シリアス21、封印！」

〔Sealing〕

ユーノとなのはとレイジングハートがそんな会話をしたら、レイジングハートから光のリボンの様な物が出てきて暴走体に巻き付き貫いた。

そして暴走体は消え、消えた中央にジュエルシードが落ちていた。

「其れをレイジングハートで触れて。」

ユーノに促され俺となのははジュエルシードに近付き、なのははレイジングハートでジュエルシードに触れた。

そしてジュエルシードはレイジングハートにより封印された。

「…………封印出来たの？」

「はい、出来ました。」

なのはがユーノに確認を取ると、ユーノは安心した顔をして頷いた。

俺はユーノの言葉を聞いて天鎖斬月を消して辺りを見渡すと、酷く破壊された道路や木などが在った。

そして耳を澄ませば、遠くからパトカーのサイレンが聞こえてきた。

……ヤバいつて！

「しっかり捕まってるよ！」

「ふえ？」

「えっ！？」

俺はなのはとユーノにそう言って二人を抱えて、全速力でその場から立ち去った（逃げ出した）。

「う、ごめんなさーいー！」

なのはが俺に抱えられながら大声で謝っていたが……

リリカルマジカル（後書き）

次回は自己紹介＋ の話（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

自己紹介はきちんと（前書き）

昨日は更新出来なくてすいませんでした。

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

自己紹介はきちんと

side 劉

俺はなのはとユーノを抱えて、急いであの場を離れて近くに在る神社にやって来た。

まあ何処に行っても良かったのだが、人氣が無くて近くに在る場所が神社だったので此処に来た訳だ。

俺は予め持ってきていたタオルで汗を拭いて、服を脱いで夜風に当たって涼んでいます。

ジャージって何もしてなくても汗を掻くのに、今回は天鎖斬月の力をフルに使って戦ったから余計に汗を掻いたんだ。

俺の体をジロジロ後ろで見ているなのはとユーノの視線を感じるが、別に見られても減る物は無いから気にしない。

あつ、でも余りジロジロ見られると恥ずかしいから止めて貰おうか。

俺は士郎さんみたいに引き締まった体つきじゃないからな……

「見るなとは言わないが、凝視しないで呉れるか？」

俺は携帯から替えのシャツを出して代わりに汗を吸った服を携帯に収納し、シャツを着ながらなのはとユーノにそう言った。

「う、ごめんね！／＼／＼」

「す、すいません！」

「否、其処迄真剣に謝らんでも……」

俺が振り返るとなのはとユーノが頭を下げて謝ってきたので、俺

は少し驚きながら二人？にそう言った。

しかしなのは、何故顔が赤いんだ？

……成る程、同年代の異性の体を見たからか……

ヤッベエ、なのはに変な風に思われてねエよな？

『変態』ってあだ名になったら死んじゃうぜ、色んな意味で。

「ま、まずは自己紹介をしようぜ？未だ互いの名前すら知らないからな。」

「「そうだね（そうですね）。」「」

俺が少しビビりながら二人？に提案すると、二人？は俺の提案に頷いて了承してくれた。

良かった、二人？の顔を見る限り俺の事を『変態』とは思ってないみたいだな。

……偽りの顔？

油断出来ないな……否、なのは達を信じないと漢が廃る……でも

もし『変態』って思われてたら……否、なのはに限ってそんな事は

……

「……ね、ねえ、彼は大丈夫なの？」

「……多分大丈夫だと思うよ。……じゃ、じゃあ、先ず私から言うね。私の名前は高町なのは、小学三年で家族や仲の良い友達のはなはって呼ぶよ。」

おっと、また自分の世界に入ってた様だな。

全く、最近考え事すると直ぐに自分の世界に入ってしまう。

ちゃんと気をつけないとな……

「僕はユーノ・スクライア、スクライアは部族名だから名前はユーノ。」

「俺の名前は佐藤劉、魔力を殆ど持たない異能の力を持った俺のはの幼なじみ？」

「何で最後疑問系？」

ユーノが俺達に自己紹介をした後、俺が自己紹介？をしたらユーノがツツコんできた。

流石は常識人のユーノ、俺の難しいボケを綺麗にツツコむとは…はやてと同等のツツコミ力を持っているな。

「仲良くなれそうだな、ユーノ。」

「劉と居たら苦労しそうな気がするけどね……」

俺は膝を地面に着けてユーノはそんな話をしながら握手をした……ちよつと待て、少し失礼過ぎないか、ユーノ？

俺じゃなくて遊星と居たら苦労するんだって、彼奴って色々と面倒臭いから。

「……劉君？」

「どうしたんだ、なのは？」

俺とユーノが握手をして友達になっていると、なのはが話し掛けてきたので俺はなのはに顔を向けた。

なのはは少し悩んだ顔をしながら俺の顔を見ていた……何か悩み事か？

「劉君のあの力……一体何なの？」

「俺の秘めたる力、例えるならスーパーサイヤ人の様な物。」

「真面目に答えて。」

「……今は未だ何も言えない、でも何時か話すから今は聞かないでくれ。」

なのはが俺の力の事を聞いて来たので俺は話を逸らす為にフザケた事を言っと、なのはが真剣な顔をして俺に言ってきたので俺はなのはの顔を真剣な顔をして見てそう言った。

なのはには未だ話せない、何時か話すつもりだが今は話す時じゃない。

俺がなのはにそう言って少し沈黙が続くと、なのはは未だ少し納得していない顔をしながら「分かった」と言ってそれ以上何も聞いて来なかった。

俺は少し安心し携帯の時計機能を使って、今の時刻を確認した。

……もうこんな時間か……

「さっ、時間が時間だから今日は帰ろうぜ。」

ガシッ!!

「……へっ？」

俺がそう言った瞬間、なのはが俺とユーノの腕を急に掴んで来た。

……い、一体何のつもりなのかな？

「私、皆に黙って来ちゃったの。」

するとなのはが少し困った顔をしながらそう言って来た。

……スッゴク嫌な予感しかしないんだけど……

「一緒に言い訳して！」

なのはは俺とユーノにそう言って、腕を掴んだまま走り出した。
し、死亡フラグしか建ってないんだけど！？

「ふ、不幸だアアアアア！！！！？」

私こと佐藤劉は、やはり幻想殺しと同じで不幸体質な様です。
チクソウ……

自己紹介はきちんと（後書き）

次回は神社の話（を予定しています）

次回もお楽しみに！

神社に居るのは神様？（前書き）

ヤバい、先週に引き続き今週も更新が遅れた……

頑張らないと……

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

神社に居るのは神様？

side 劉

「…………であるからして、此処でさっき書いた公式を使って解くんだ。」

理科の先生が一生懸命黒板に字を書きながら俺達にそう言ってきたが、俺は余りにも凄まじい眠気の所為で話が全く頭の中に入って来ない。

昨日、なのはがユーノと出会って魔法少女になって、一緒に力を合わせてジュエルシードを封印した。

此処迄は無事に終わったんだが、封印が終わった後夜中に家を出た事が士郎さん達にバレていると推測したなのはに、無理矢理俺を家に連れて行って言い訳と一緒にさせられた。

まあなのはの推測は当たっていて、心配した士郎さんが玄関で仁王立ちしてたんだ。

そしてなのはと一緒に頑張って士郎さんを説得して、何とか理解して貰って午前二時過ぎに高町家から解放させられたんだ。

ユーノはなのはが一生懸命世話をする（笑）と言う約束で、高町家で飼われる事になった。

一応ユーノに、なのはの着替えは覗かない様に釘を差しておいたよ。

否さ、流石に年頃の女の子の着替えを同年代の男が見るのはダメだろ？

まあ家に帰って来たのは午前二時半過ぎで、結局寝た時間はたったの四時間半だったんだよ。

今日は修行するのを止めて寝てただけど、肉体年齢が小学三年なので全然寝足りない。

あつ、もうダメだ……

俺は腕を枕にして、目を閉じて意識を失った。

此処は……何処だ？

気付いたら見た事の無い光景が広がっていて、時刻は夜なのか星が空に沢山輝いていた。

ただど感覚が全く感じられなくて、身体が此処には無い様な気がするんだ。

……これは、夢なのか？

それにしても、随分とハッキリしている夢だな……

「此処迄の……様ですね……」

！？

すると突然、後ろから声が聞こえてきたので俺は後ろに意識を向けると、其処には地面に倒れ込んでいる一人の女性が居た。

俺は声を出そうとしても声が全く出ず、それ所か視界がドンドン霞んで行った。

た、頼む、彼女は一体何なんだ！？

「もし願いが叶うなら……もう一度だけ会いたかった。」

するとその女性の身体が光り出し、一匹の猫になっていた。

な、何なんだよ！？

俺がそう思った瞬間、視界が完全に霞んで何も見えなくなった。

「！？ハアハアハア……」

俺は目を覚まして、回りを見ると皆は弁当を取り出していた。

昼休みなのか……しかし、あの夢は一体……？

夢なのか現実なのか、それとも過去の出来事なのか未来の出来事なのか……

ああ、考えれば考える程分からなくなってくる！！

「あつ、劉君目が覚めたんだね？今からアリサちゃん達と一緒にお昼ご飯を食べるから、一緒に屋上に行こ？」

「……………あ、嗚呼。」

なのはが弁当箱を持って俺の席にやって来て、笑顔で俺を誘ってきたので俺は少し間を開けて応えた。

俺は鞆からはやてが作ってくれた弁当を取り出して、なのはと一緒に屋上に居るアリサ達の所に行った。

……………あの夢、確かめる必要が在るな。

俺はそう思いながら屋上に歩いて向かった。

……

俺・なのは・ユーノは今、神社に向かって全速力で走っている。何故なら、俺達が下校中にジュエルシードが発動したらしい。俺には魔力が無いので発動したのか分からんが、なのはが言っているんだから間違い無いだろう。

しかし、何故下校中に発動するんだよ……

下校中じゃなくても普通に深夜で良いだろうが、それに今日見たあの女性の事に付いて調べようと思ってたのによ……

そう思いながら走っていると、何時の間にか神社に着いていた。そして目の前には、何故か犬の化け物が俺達を睨みながら居ました。

……今更だけどさ、何で犬なんだろうか？

「ユーノ君、何あれ!？」

「ジュエルシードが原住生物を取り込んだんだ!」

なのはが目の前に居る犬を指さしながらユーノに聞くと、ユーノは真剣な顔をしながらなのはの質問に答えた。

昨日より強いつて事は分かる、分かるけど戦わないとダメなんだ。

「なのは、俺が時間を稼ぐから昨日みたいに封印してくれ。」

「えっと……どうするんだっけ？」

「…………ユーノ？」

「分かった、頑張ってね。」

「嗚呼。」

俺はユーノになのはの事を任せて、天鎖斬月を口寄せし天鎖斬月を持って犬に突っ込んだ。

そうそう、昨日は少し油断して何も装備してなかったが、今回からは一護の正解状態の死霸装を纏う様にしたんだ。

否さ、管理局とは何れ出会う訳だからさ、説明しろって言われたって出来ないじゃん？

だから、これをバリアジャケットとして誤魔化しているんだ。

何故かは分かんが、遊星が呉れた携帯にこんな機能が付いていたんだ。

……流石転生者とマッドサイエンティストか？

俺はそう思いながら、天鎖斬月の峰を使いながら犬を攻撃していた。

神社に居るのは神様？（後書き）

次回は犬との戦い（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0974u/>

魔法少女リリカルなのは 常識を変える者・創造する者

2011年12月17日22時45分発行